

3. 宮津城跡第13・14次発掘調査報告

1. はじめに

この調査は平成16年10月20日の台風23号災害を契機とした河川激甚災害対策特別緊急事業(大手川改修工事)(平成18年度)、および、大手川激甚災害対策特別緊急事業(平成19年度)に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。一連の事業に伴う発掘調査は、平成17年度に始まり、今年度が最終年度である。平成17年度の調査については、すでに、概要を報告しており、今回は、平成18・19年度の調査について報告する。

平成18年度に実施した第13次調査では、調査対象地内の5地点に調査区を設定し、調査着手順に13-1～5区と名付けて調査した。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長(当時)石井清司、同調査員村田和弘が担当した。調査期間は平成18年6月5日～平成18年8月30日と平成18年12月18日～平成19年1月26日、調査面積は820m²である。平成19年度に実施した第14次調査では、調査対象地内の3地点に調査区を設定し、調査着手順に14-1～3区と名付けて調査した。現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長石井清司、同主任調査員森島康雄が担当した。調査期間は平成19年5月28日～8月30日、調査面積は690m²である。3か年の調査で宮津小学校前から大手橋東詰までの大手川右岸沿いに延長約265mにわたって調査を実施したことになる。

本報告の掲載の遺物写真は調査第1課資料係主任調査員田中彰が撮影した。調査に要した経費は、京都府土木建築部が全額負担した。

調査にあたっては、宮津市教育委員会、京都府教育委員会をはじめとする関係機関や地元自治会のご指導、ご協力を得た。記して感謝したい。

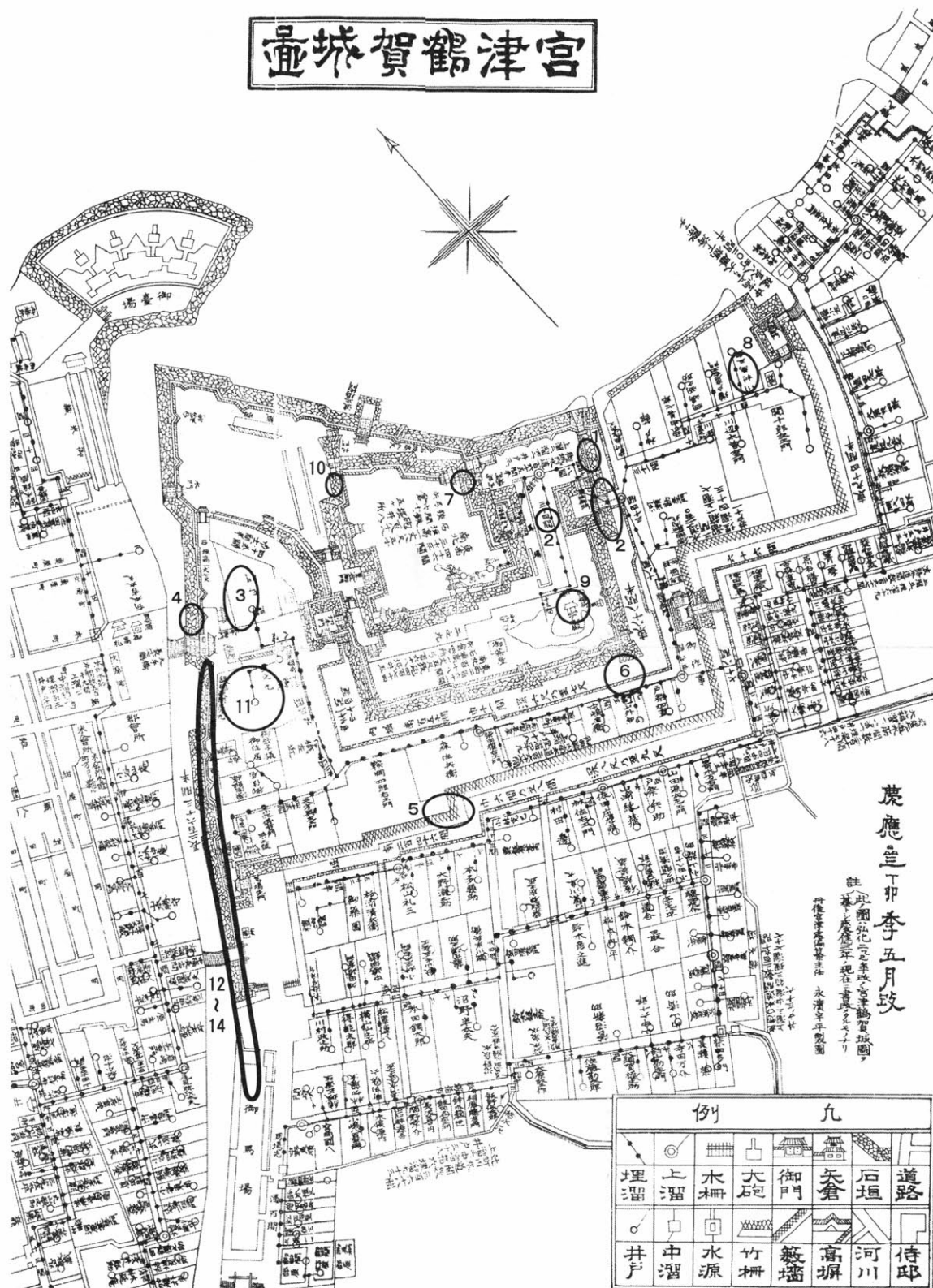
(森島康雄・村田和弘)

2. 宮津城跡の歴史と現況

宮津城跡は宮津市鶴賀に所在する近世城郭遺跡である。宮津城の歴史は天正8(1580)年、細川藤孝によって築城されたことに始まる。慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いの前に細川藤孝は宮津城を自ら焼き払って田辺城(舞鶴市)に籠城し、西軍の兵力の一部を足止めしたと伝えられる。この功によって細川氏が九州に封じられた後、京極高知が田辺城に入り、丹後を支配した。第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宮津)



京極高知が元和8(1622)年に死ぬと、丹後は3人の子に分割して相続され、それぞれ田辺・宮津・峰山藩となった。宮津藩主京極高広は城下の整備を開始し、寛永2(1625)年に完成したとされている。高広の子京極高国が寛文6(1666)年に改易となった後、天領を経て、宮津藩は、永



第2図 宮津城絵図(慶應3年『宮津鶴賀城図』)と調査地位置図

井・阿部・奥平・青山・松平(本庄)家と藩主がめまぐるしく変わり幕末を迎えた。

宮津城は、宮津湾に面して築かれた平城で、本丸のまわりを二ノ丸が囲み、内堀を介して西・南・東を三ノ丸が取り囲む構造をしている。大手川と大手川から分かれた大膳川が外堀である。本丸・二ノ丸は廃城後に城の縄張りを反映しない形で市街化が進んだため、城の痕跡をほとんど残していないが、三ノ丸と城下町は江戸時代以来の町割りをとどめており、江戸時代の絵図との対比が可能である。

宮津城の各郭のおおよその位置は江戸時代の絵図との対比に加えて既往の発掘調査成果から復元することができる。本丸・二ノ丸と内堀関連の主な調査成果としては以下のものが挙げられる。

宮津警察署建設に伴って行われた第1次調査では東内堀の石垣が検出され、関西電力宮津営業所建設に伴って行われた第2次調査では内堀の石垣や内堀に架かる土橋を検出し、絵図にある「不明門」南東部の石垣の出隅が確認された。また、北近畿丹後鉄道宮津駅の建設に伴う第6次調査では内堀南東隅付近の石垣が検出され、この付近の内堀の幅が約22mであることが判明した。さらに、太田病院の介護施設建設に伴う第10次調査では本丸と二ノ丸の境の石垣が確認されている。

三ノ丸と外堀関連の主な調査成果としては、大手橋建設に伴う第4次調査で、西の外堀(大手川)の石垣が検出され、保健センター建設に伴う第5次調査で三ノ丸南辺の土塁と外堀が屈曲する部分が確認されている。

(森島)

3. 調査概要

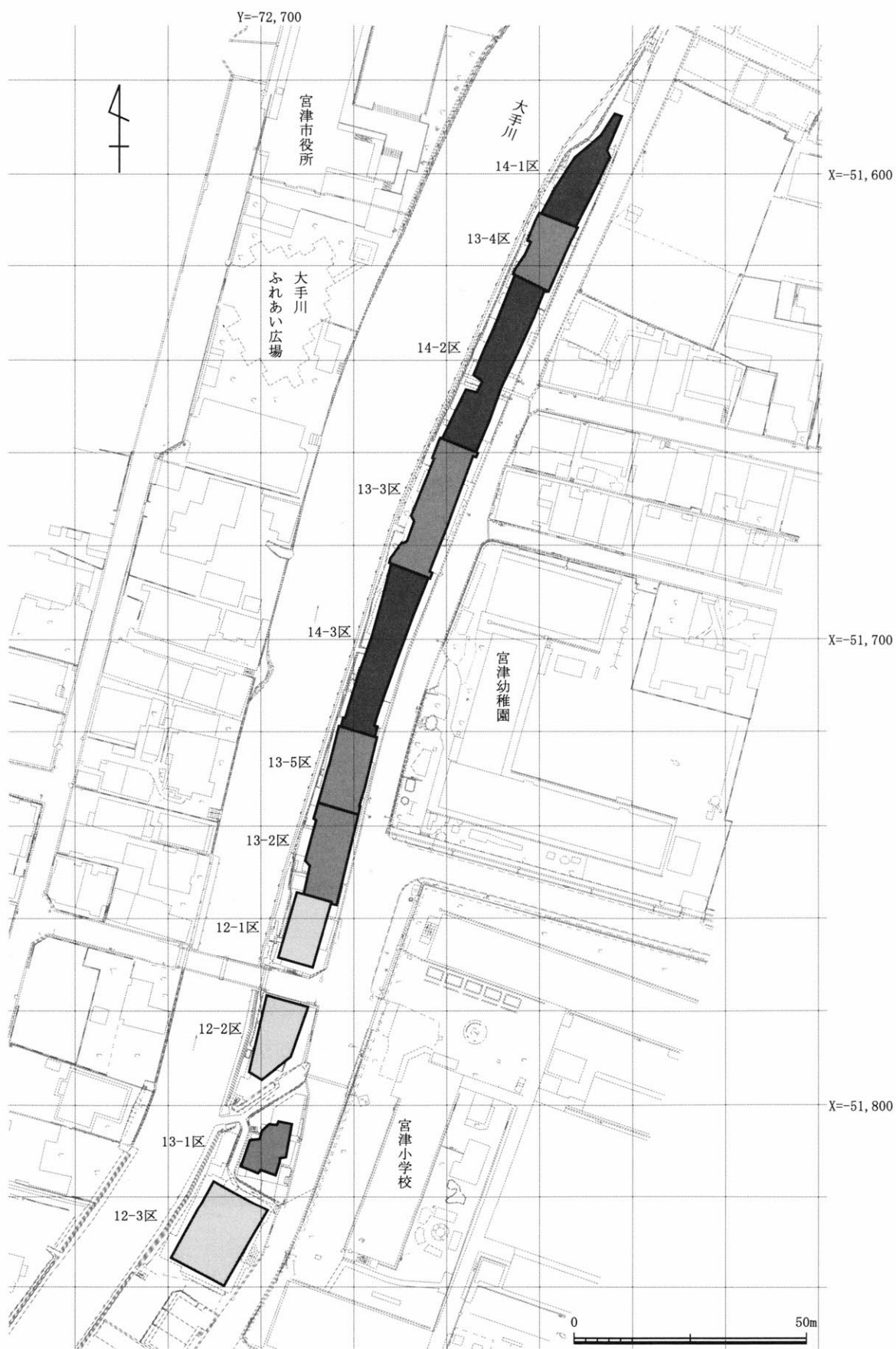
(1) 検出遺構

①13-1区

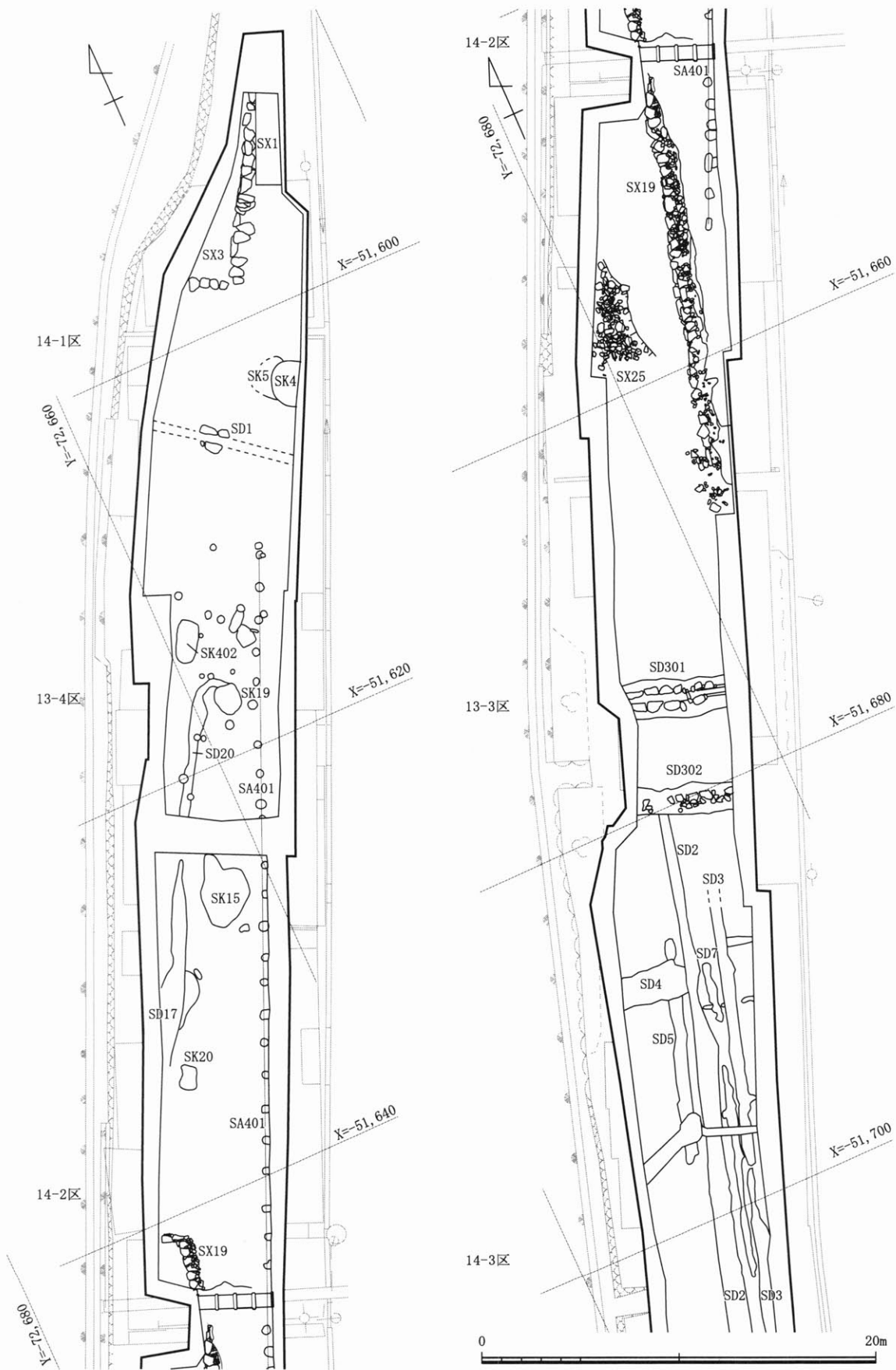
13-1区は、中橋南側の宮津小学校の西側に設けた調査区である。絵図によれば城外に設けられた馬場の北端部にあたる。遺構は、現地表面下約2mの暗青灰色粘性砂質土上面で確認した。この面で検出した遺構は、溝SD101のみであった。

溝SD101(第5図) 幅約0.2m、深さ約0.1mの溝として検出したが、調査区の壁面を観察すると、標高約0.5mから約0.5mの深さで掘り込まれていることがわかる。調査区の壁面が溝に対して斜交しているため、断面図では掘形が斜めに見えるが、実際にはほぼ垂直に掘り込まれている。掘形の底に節を抜いた直径約7cmの竹筒を据え、灰色系の砂で埋め戻している。調査区の北西側では、竹筒の連結部を確認した。連結部は角材を刳り貫いて両側に竹筒を挿し込んで繋ぐ構造になっている。連結部付近はやや幅広く掘られ、竹筒の高さを調整するための石が竹筒の下に挟まれていた。

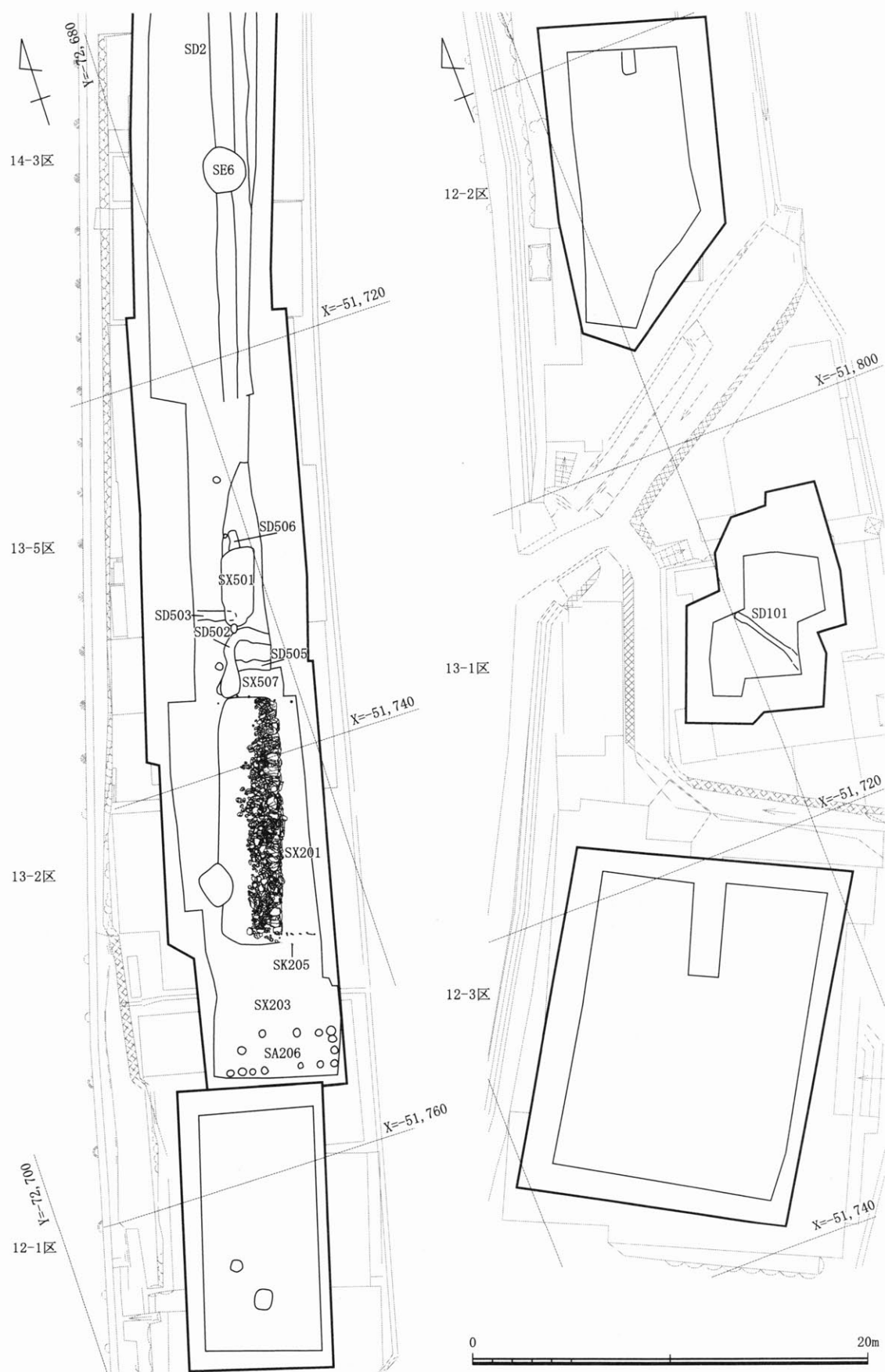
絵図には水源から「上溜」「中溜」「埋溜」を介して繋がれた水道管が各戸に導かれている様子が描かれている。13-1区付近に水道管が描かれた絵図はないが、本遺構も水道施設と思われる。第3次調査(1983)でも幕末頃(19世紀代)に造られた同様の施設(SD0302、SD0604)が検出され



第3図 調査区配置図



第4図 検出遺構平面図(1)



第5図 検出遺構平面図(2)

ている。溝内から出土遺物が出土していないため年代は特定できない。

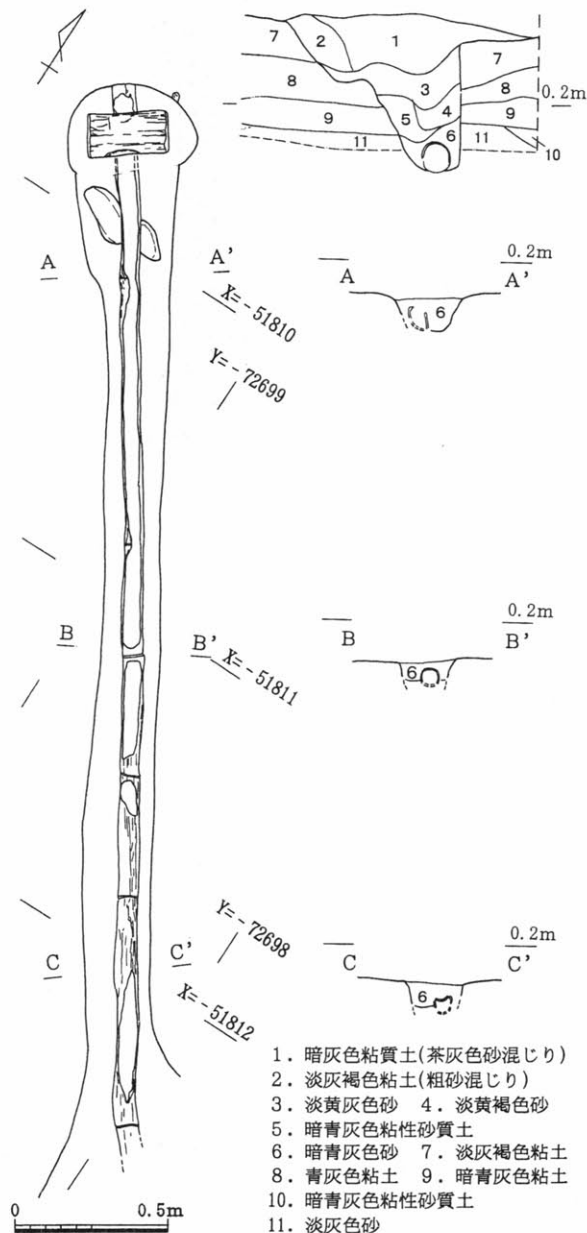
②13-2・5区

宮津小学校と宮津幼稚園の間の交差点に隣接する調査区である。現存する絵図では、宮津城の南西隅の枡形虎口周辺に相当する地点である。調査は13-2区を平成18年夏に、13-5区を平成19年1月に行ったが、両調査区にまたがって枡形虎口関連遺構が検出されたために、ここではまとめて報告することにする。絵図には門の名称が記されているものもあり、慶応三年の『宮津鶴賀城図』（1867年）では「馬場先門」と「太鼓門」、天保城絵図(1831年)では「切戸口門」という門が存在していたとされる地点である。

枡形虎口を構成する遺構は石垣S X 201、土塁S X 203、S X 507、塀S A 206である。枡形虎口は一の門を入ると正面が石垣S X 201、左手が土塁S X 203で閉ざされ、右に折れて土塁S X 507に開かれたとみられる二の門をくぐって城内道路に繋がる構造をしていたと復元できる。

石垣S X 201 13-2区北東部で検出した東に面を向ける南北方向の石垣である。検出面の標高は南端で約0.95m、北端で約0.50mを測り、南側の方が良く残っていた。石垣の全長は約11.6m、高さは最大約1.2mを測る。石垣の勾配は約76～78度と急で、反りは認められない。石材は大半が花崗岩である。大きさは長辺75cmのものが最大で、40～50cm程度のものが多い。角が丸みを帯びたものが多く、面加工を施したものは少ない。矢穴を持つものは認められない。積み方は野面積みの乱積といえるが、北に向かって緩やかに下がる不明確な目地を観察することができる。石材の長手を奥行き方向に向け、比較的平坦で面積の大きな小口面を見せるように据えて積んでいる。間石は抜け落ちているものが多く、隙間が大きく開いている。根石は特に大きな石を選んでいるわけではなく、積み石と変わらない。

裏込めは、約1.5mの幅に、長径10～20cm程度の石が詰められているが、中には長径40cm程度の積み石程度の大きさのものも含まれている。裏込めの背後は、暗青灰色粘土、淡灰色粗砂、黒青灰色粘土の順に堆積が確認できた。



第6図 13-1区溝S D101実測図



第7図 13-2.5区虎口実測図(1)

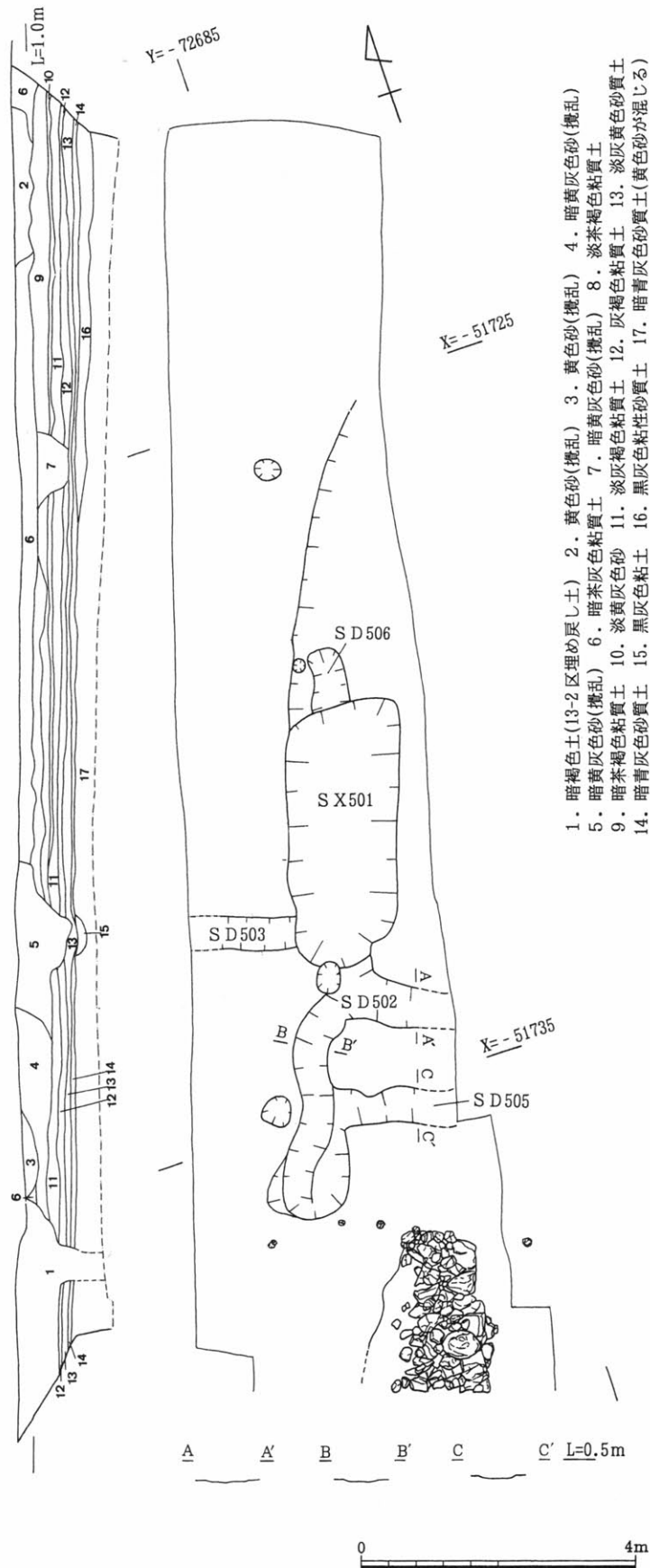
裏込め断ち割りの断面観察で、石垣構築以前の溝状遺構を確認した。幅約0.4mで中層に植物質のものを含む砂で埋没している。

裏込めの北端部で、土師器の皿の外面にくずし字で「色」と書かれた墨書土器が出土した(第29図23)。

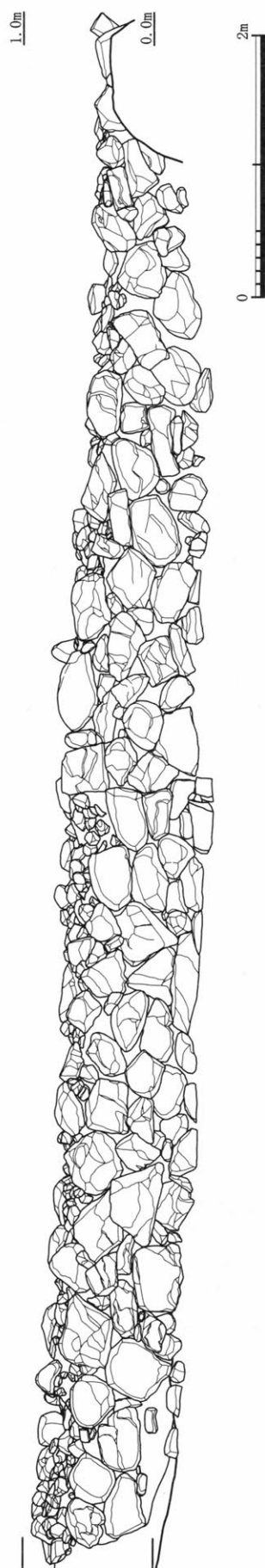
石垣は、南北とも基底部分が高くなって終わり、石垣の両端には石垣に直交する方向の杭列が検出された。これらの杭列は土塁の裾の土留め杭であり、石垣は両端とも土塁に取り付いていたことがわかる。

土塁 S X 203 石垣 S X 201の南端に直交する杭列を裾の土留めとする土塁である。掘削時には土塁の存在に気付かず、土塁を断ち割る結果となった。約1.7mの間に6本の杭が打たれ、西端の杭の南側にも1本打たれていた。杭の間には板材が差し渡されており、土を留める機能を増したものと考えられる。

土塁の下層には灰色系の粘質土、中層には灰褐色系の砂質土を用い、上層には硬く締まった明黄褐色砂質土が用いられている。上層は意図的に固められた層の可能性が高いが、石垣の天端が残っていないので、土塁頂部も削平されていると考えられる。



第8図 13-2・5区虎口実測図(2)



土塁の上面で柱列を検出した。柱列が土塁に平行していることなどから、これらは掘立柱式の土塀の柱穴と考えられる。土塀の支柱穴がSP 1～8、控柱穴がSP 9～14で、ともに直径20cm前後を測る。柱穴の多くには平らな石の礎板が据えられていた。柱穴の検出面は約0.65m前後であるが、礎板がいずれも柱穴から頭を出した状態で検出されていることや、石垣SX201の天端が標高1.0mよりは高いことから、本来は数十cm上から掘り込まれていたものと推定される。

支柱穴の間隔は約0.5～1.0m、控柱との距離は0.7～1.9mといずれも不揃いであり、異なった時期のものが重複して検出されている可能性もある。

土塁SX507 前述の石垣北側の杭列の北側に東西方向の土塁が想定できる。2.8mの間に5本の杭が打たれ、西に少し離れてさらに1本打たれている。やはり、調査時には土塁の存在を認識できておらず、断面図を提示することができないが、石垣北端の杭列付近から北に向かって立ち上がる土塁の横断面が13-5区東壁の写真(第10図)に写っている。基底幅は約3.5mである。

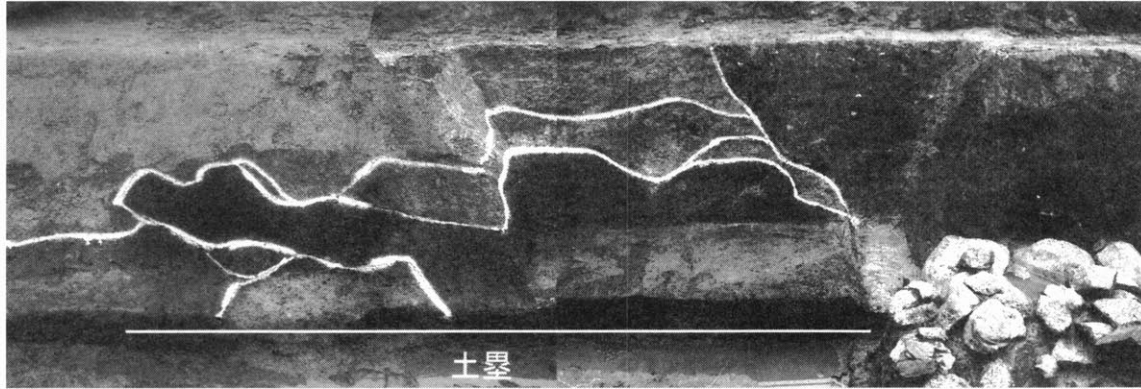
土塁の西端は外堀(大手川)沿いの城壁に取り付き、東側は枡形虎口二の門に取り付いていた可能性が高い。

土坑SK205 土塁SX203上の石垣南端部に隣接する地点で検出した長径約0.45m、短径約0.35mを測る楕円形を呈した土坑である。深さは約0.1m残っていた。土坑の検出面近くから、唐津焼皿が1点出土した(第11図)。埋土中には多量の炭が詰まっており、遺物にも火を受けた痕跡がみられる。

土坑SX501 南北約3.9m、東西約1.7mを、深さ約0.1mを測る楕円形を呈した土坑を検出した(第12図)。土坑の北半には木の枝などの植物質のものが堆積していた。土坑内からは、土器・陶磁器類のほか、漆器碗・皿、曲物底板、櫛、古銭などが出土した。出土遺物には火を受けたものが多い。

溝SD502 土坑SX501の南に隣接して検出したL字に曲がる溝である。幅0.5m、深さ0.1mを測る。最大幅約0.9m、深さ約0.06mを測る。調査区東壁の写真で見ると、土塁SX507に覆われており、時期的に先行する。門などの建物の雨落ち溝の可能性が考えられる。

溝SD503 土坑SX501から城壁外である西側の大手川につなが



第10図 13-5区東壁堆積状況

ると考えられる溝で、幅は約0.5m、深さ約0.15mを測る。西側には城壁があると想定されることから、城壁の下部を通る溝であると推測できる。

溝S D 505 幅0.7m、深さ0.2mを測る東西方向の溝で、溝S D 502に切られている。

溝S D 506 土坑S X 501の北側で検出した幅0.4m、深さ0.05mを測る南北方向の溝である。北端部が緩やかに浅くなっていることから、本来は北側に続いていたと推測する。14-3区の溝S D 2につながると考えられる。

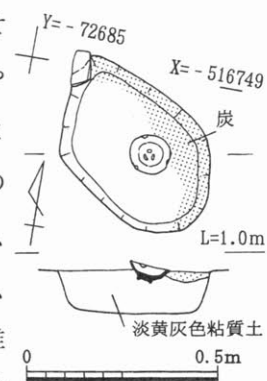
③13-3区

宮津幼稚園北西の交差点の西側に設けた調査区である。東西方向の石組溝2条などを検出した。

石組溝S D 301 調査区中央部を東西に横切る形で検出した。現在、宮津幼稚園北側を通る道路の南側溝の延長上にはほぼ相当する位置にあたる。この道路は絵図にも見えるもので、S D 301はこの城内道路の側溝と思われる。検出面の標高は0.8m付近であるが、壁面の観察によれば標高1.1m付近から掘り込まれている。

検出長は約5.2m、溝の内法は約0.25～0.35mを測る。掘形は幅約1.9mで、側石の背後には長径0.1～0.2mの裏込め石が詰められている。側石に用いられているのは主として長辺0.4～1.0mの花崗岩の割石で、矢穴が残るものがみられる。大きな石材は、長手が主軸に平行になるように据えられている。溝底は標高0.35m前後で、板や石は敷かれていない。

溝の東側約1.4m分は底に一辺12cm前後の角材を敷いた上に石材を載せているのに対して、西側3.8m分は底に直接石材を置いており、構造がやや異なっている。また、東端から約2.0mのところを水路を堰き止めるように石材が立てて据えられ、石材の東側は、溝底が深くなって植物質の堆積物が多量に溜まっていた。この石材は水路を流れてきたゴミを溜め、上澄みを下流に流すための施設と考えられる。これらから、S D 301は、溝の構造が変化するところよりも西側が暗渠、東側が開渠であったと推定される。西側は城壁の下をくぐって大手川に排水する暗渠部分で、改修が困難なために腐食しやすい角材を用いなかったものであり、溝の中

第11図 13-2区
土坑205実測図

に立てられた石材は、暗渠部分にゴミが詰まることを防止する目的で作られたものであると考えられる。

石組溝 S D 302 石組溝 S D 301の南約 5 m で検出した。大手川への排水溝であるが、S D 301よりは残りが悪い。側石は残っておらず、溝底に敷かれた板石が残っていた。調査区西壁に見えている暗渠の断面によると、内法は、幅約 0.5 m、高さ約 0.3 m を測る。溝底は標高 0.65 m 前後を

測るが、調査区内で検出した石材は標高 0.4 m のものが多く、幾度かの改修を受けている可能性がある。江戸時代後半の遺物が出土している。

(森島・村田)

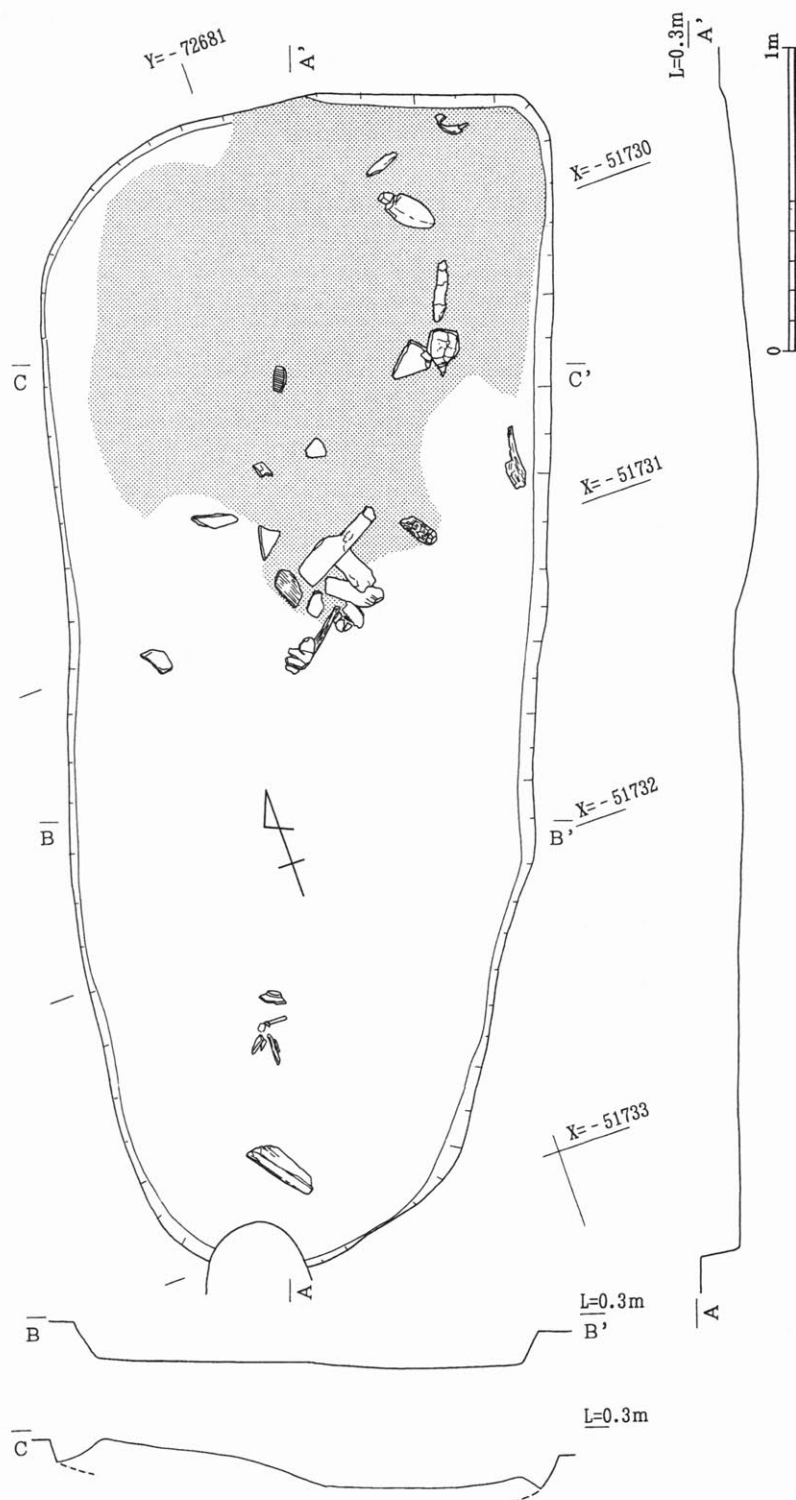
④13-4 区

宮津市役所の対岸に設けた調査区である。第13次の調査区の中では、最北端部に位置している。10数基の柱穴や土坑、溝などを検出した。

柵 S A 401 柱穴が南北方向にほぼ等間隔に並んでおり、柵として復元できる。14-2 区に続き、過半が14-2 区に含まれる。

溝 S D 20 調査区南部で検出した幅 0.5 m、深さ 0.15 m を測る溝である。14-2 区 S D 17 に続くものと思われる。

土坑 S K 19 調査区の中央で検出した南北 1.5 m、東西 1.2 m の楕円形を呈する土坑である。深さは 0.12 m を測る。この土坑は、溝 S D 20 の北端が東に屈曲してこ



第12図 13-5区土坑S X501実測図

の土坑に繋がるが、
切り合い関係につ
いては不明である。

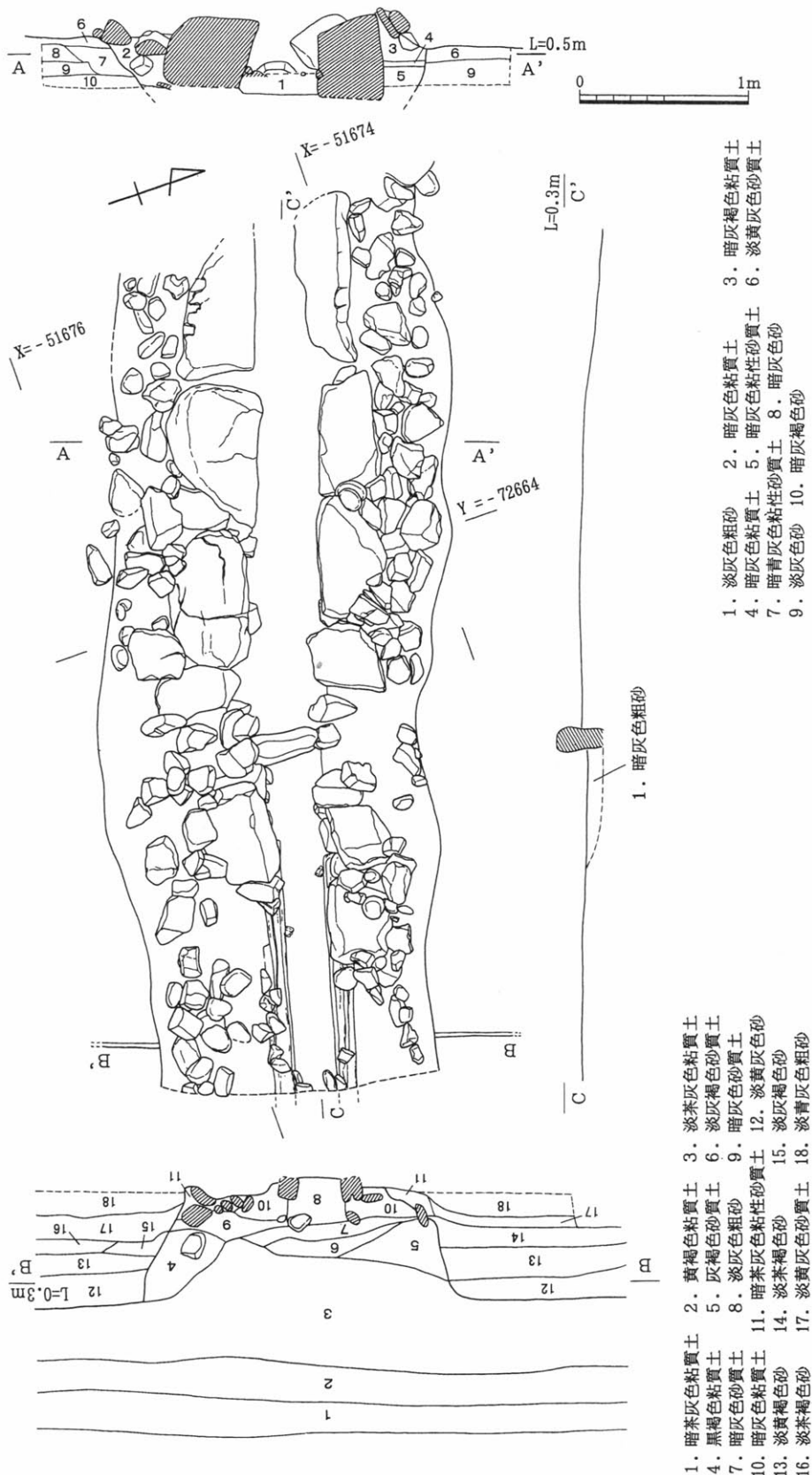
土坑 S X 402 (第
15図) 調査区北西
部で、土坑内に径
拳大～人頭大の川
原石が詰まった遺
構を検出した。遺
構の時期は、遺物
から江戸時代後半
のものと考えられ
る。

遺構検出時に土
師器などの土器類
のほかに土製の鈴
や土錘などが出土
している。

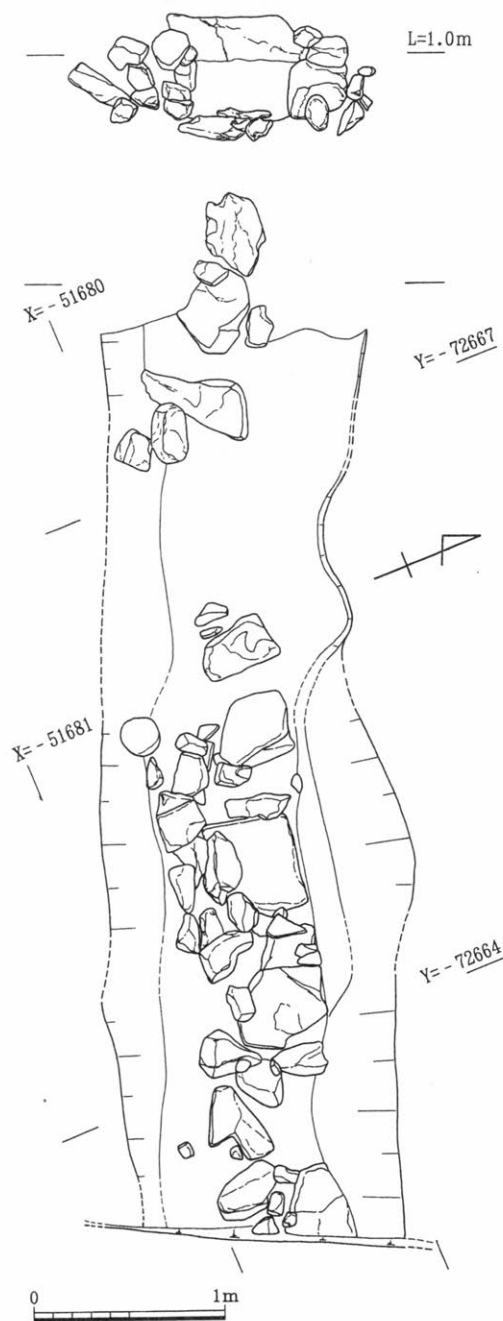
(村田)

⑤14-1区

14-1区は大手
橋のやや南に位置
するが、往時の大
手橋は現在より南
に位置していたの
で、当調査区は大
手橋東詰めに隣接
する位置に当たら
んと想定される。調
査区北部の地表下
0.3m付近で石垣と
見られる石列が南
北方向に見えるは
じめたが、調査区南
半部では後世の削



第13図 13-3区石組溝301実測図



第14図 13-3区石組溝302実測図

平が著しかった。削平を免れた調査区東の道路側の土層断面の観察によれば、地表下約0.2～0.6mには茶橙色砂質土を主体とする薄い層状を呈する堆積があり、路面とみられる。その下には暗茶黄色砂質土、暗茶褐色砂質土が堆積するが、これらの層には路面状の堆積はみられない。後述するSD1やSK4はこれらの層を切り込む遺構である。

土坑SX1 調査時には調査区北端部に東に面を向けた石垣があると考えていたが、これは、後述する石垣SX3の裏込めを切り込んで築かれた近代の土坑であり、土坑のまわりに板材をめぐるために、石垣裏込めの石の一部を利用していたものであることがわかった。この場所には第2次世界大戦中に防空壕があった。^(注1)防空壕は北側が入口で、中は大人が背をかがめて歩く程度の深さであったという。SX1がこの防空壕である可能性が高い。

石垣SX3 14-1区北部で検出した南北方向の石垣である。西に面を向け、調査区北端から南に約8.4mのところまで直角に西に折れ、約2.2m続いてさらに調査区外に延びる。掘形の幅は1.2m前後で茶褐色粘質土と礫で埋められている。石垣前面の掘形は地下水位が高く明らかにできなかったが、石に接して黄色粗砂が堆積しており、これが掘形を埋めた層と思われる。この上面の一部に炭化物が薄く堆積していることが確認でき、地表面と考えられる。標高は0.35m前後である。

裏込めの状況から高石垣とは考えられず、城内の屋敷地を画する石垣と考えられる。築造年代は明らかでないが、石垣を埋めた層からは幕末～明治初期の遺物が出土しており、幕末までは機能していたものと判断できる。

土坑SK4・5 14-1区中央部東寄りで検出した。上部が削平されて深さ10cm前後しか残っていなかったが、わずかに残っていた調査区東壁の断面の観察から、標高0.8m付近から掘り込まれていることがわかった。土坑底には円礫が多数認められた。石の大きさや底のレベルがそろっていることから土坑底に敷かれたものと考えられる。

石組溝SD1 調査区中央部で検出した大手川に直交する方向の石組溝である。大半が破壊されて長さ約1.5m分だけが残っていた。長辺0.6～1.0mの花崗岩の長辺を溝の流れの方向に向け、

底には円礫を敷き詰めていた。溝の内法は0.3～0.4m、深さは最大0.4m残っていた。13-3区の石組溝と同様に、城壁の下をくぐる暗渠排水溝と考えられる。

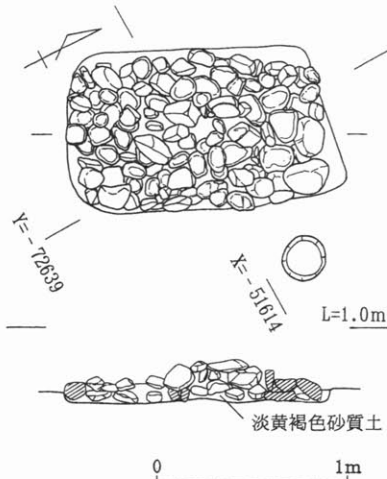
調査区東壁の観察によれば、SD1は暗茶黄色砂質土を切つて構築されており、その上層に14層を溝底堆積物とする石組の排水溝が観察できる。この排水溝は、SD1を踏襲した暗渠排水溝とみられる。SD1底面の石敷きの下から土師器杯(29)・備前焼すり鉢(30)が出土している。

⑥14-2区

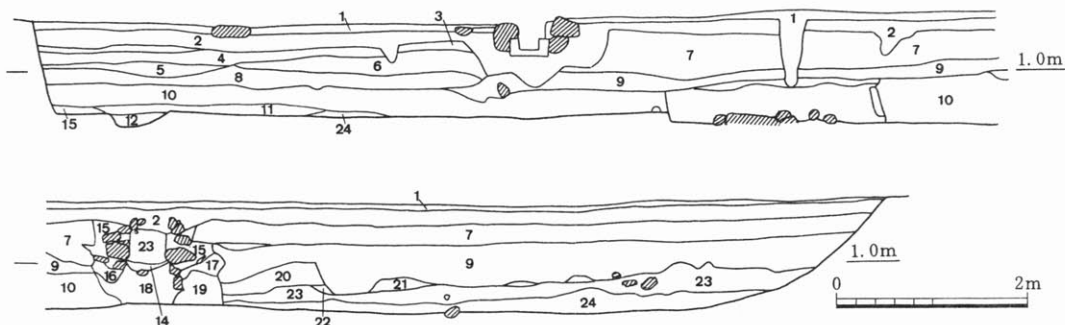
大手川ふれあい広場の対岸に設けた調査区で、北側が13-4区、南側が13-3区に続く。調査区東壁の断面観察によれば、地表下0.3m付近で14-1区と同様に薄い層状の堆積が認められ、路面と思われる。13-4区から続く柵SA401はこの層より下から掘り込まれている。この下には茶灰色系統の砂質土が0.5～0.6m堆積し、灰青色シルトとなる。柵SA401以外の遺構はこの層の上面で検出した。

柵SA401 調査区東端に沿って検出したピット列で、柵と考えられる。調査区の間や攪乱で検出できていないものもあるが、13-4区から30間、延長4.56mにわたって直線的に続いている。ピットの心々距離は1.6mを基本とするが、一部で間隔が異なるところがある。埋土は灰茶色系の砂質土である。出土遺物からは時期を決定できないが、層位からみて江戸時代後期以降の遺構と思われる。

石垣SX19 13-3区北部から14-2区の南部にかけて検出した。南南東から北北西に西に面を向けて続き、14-2区中央付近でやや鈍角に西に折れ、南に面をもつ石垣となり西に続く。延長約20mにわたって検出した。石材はほとんどが花崗岩の割石である。掘形は幅1m前後で、角礫や瓦を多く含む土で埋められている。石垣は最大3段を確認できたが、最下段は地下水位以下にあり、図化することはできなかった。石垣前面の掘形は幅0.3m足らずで、基底から2石目の

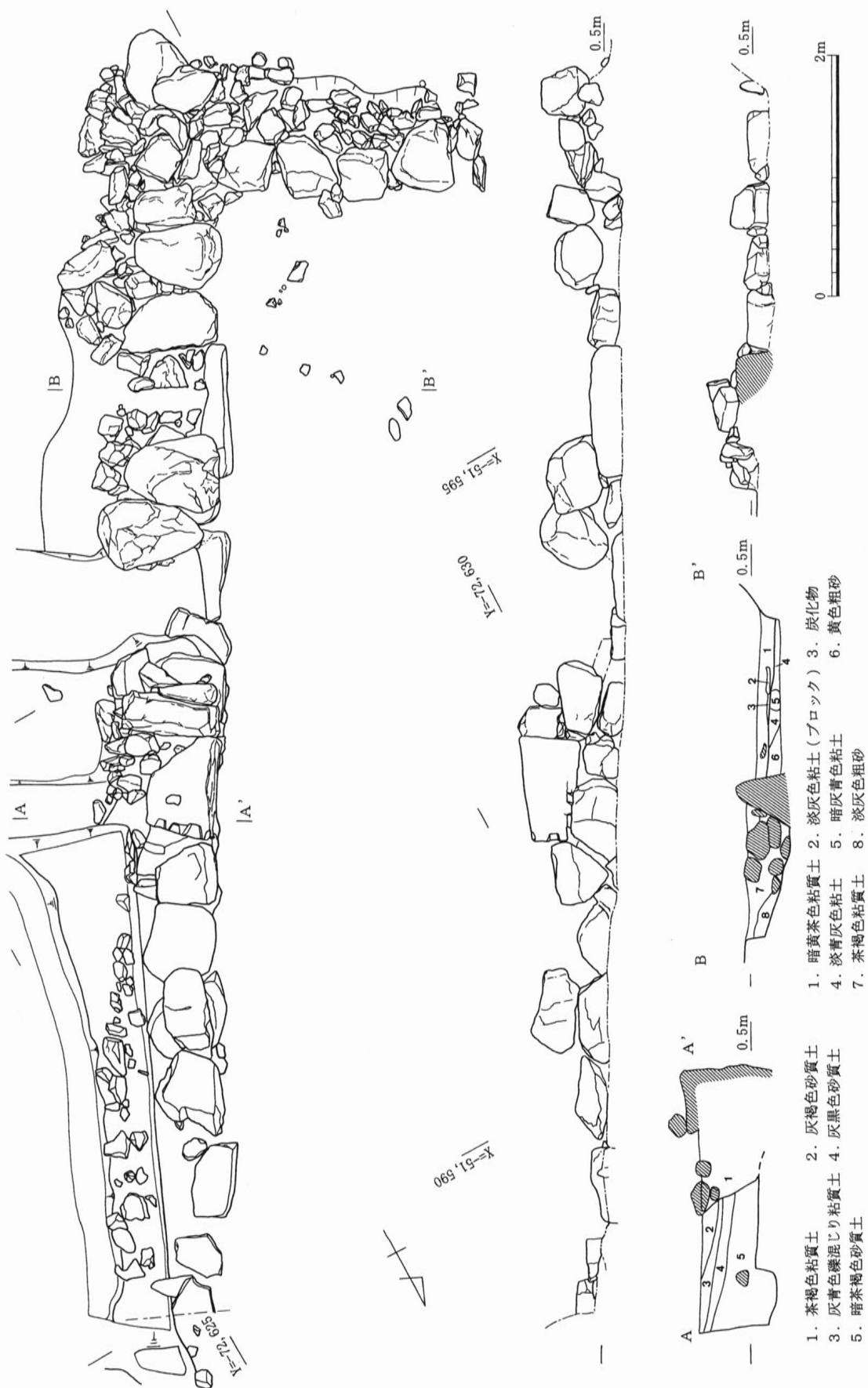


第15図 13-4区土坑402実測図



- | | | | | |
|---------------|------------|-------------|-------------|-------------------|
| 1. アスファルト・コン碎 | 2. 暗茶色砂質土 | 3. 淡灰黄色砂質土 | 4. 灰黄色砂質土 | 5. 茶橙色砂質土 |
| 6. 橙茶色砂質土 | 7. 橙茶色砂質土 | 8. 暗茶色砂質土 | 9. 暗茶黄色砂質土 | 10. 暗茶褐色砂質土 |
| 11. 淡灰色砂質土 | 12. 青灰色砂質土 | 13. 淡灰黄色砂質土 | 14. 茶灰色シルト | 15. 茶灰色砂質土 |
| 16. 茶灰色粘質土 | 17. 黄茶色砂質土 | 18. 淡橙灰色砂質土 | 19. 暗灰黄色砂質土 | 20. 暗茶褐色砂質土(炭を含む) |
| 21. 白色粗砂 | 22. 橙黄色砂質土 | 23. 暗灰茶色砂質土 | 24. 灰黄色粗砂 | 25. 淡黄灰色砂 |

第16図 14-1区東壁土層断面図

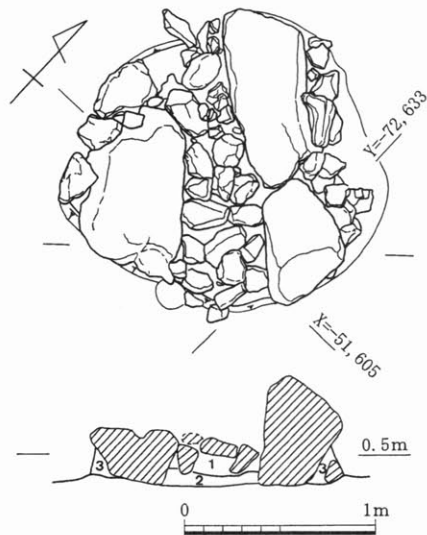


第17図 14-1区石垣S X 3実測図

半ばまでが掘形に埋まっている。石垣構築後、石垣の前面に厚さ5cm前後の淡灰茶色粘土を敷いて路面としている。路面の標高は0.35m前後を測る。

裏込めの状況から高石垣とは考えられないことや、石垣の前が粘土敷きの城内道路となっていたと考えられることから、外堀の石垣ではなく、三ノ丸の屋敷地と城内道路を画する石垣と考えられる。裏込めから鉄線切り(コビキB)の瓦が出土していることから、天正末年以後に構築されたことが分かる。石垣は1620年前後までの遺物を含む層で埋められている。

石垣 S X 25 14-2区南西隅でみつかった集石は、石垣19を埋めた層を切り込んだ掘形の中に花崗岩の角礫が詰められたもので、外堀石垣の裏込めにあたると考えられる。石垣面は現在の大手川の中にあったものと推定されるので、上部はすでに削平されているが、基底部は川底に残存している可能性が高い。軒棧瓦の破片が出土したが、S X 25の裏込めの直上にはコンクリート基礎に伴う捨石があり、裏込めと捨石の区別が容易でないところがあった。このため、軒棧瓦が石垣の年代の上限を示すものかどうかは不明である。



1. 淡灰茶色粗砂 2. 淡灰色砂質土
3. 淡灰色砂混じり粘質土

13-3区北西部でも石が多数詰まっている状況を確認していたが、裏込めとの認識ができなまま掘削してしまった。13-3区の西壁面を検討すると、この石垣の裏込めは、第18図 14-1区石組溝SD1実測図石組溝SD301のやや北付近まで続いて、西に折れていたものと推定される。

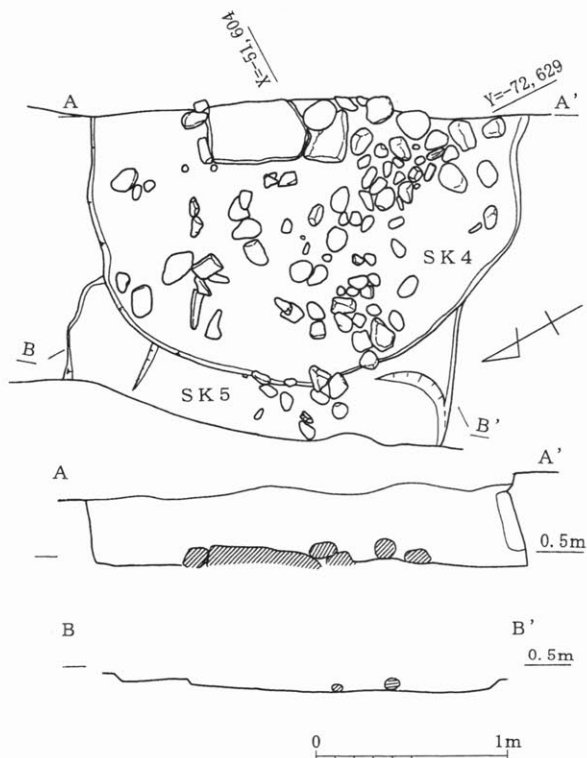
土坑 S K 15 調査区北部で検出した不定形の土坑である。深さは西半部では約5cmだが、東半部では約10cmとやや深くなっている。土師器皿、瓦質土器鍋などが出土した。

土坑 S K 20 調査区北部西寄りで検出した1.2×0.8mの方形土坑である。深さは約0.1mを測る。土師器皿のほか国産陶器甕と瓦の破片が出土した。

溝 S D 17 調査区北半部の西寄りで検出した。調査区北端付近で途切れているが、13-2区の溝SD20に続くものと思われる。瓦質土器鍋、備前焼大皿、土鍾などが出土した。

⑦14-3区

宮津幼稚園の西側に位置する調査区である。



第19図 14-1区土坑SK4・5実測図

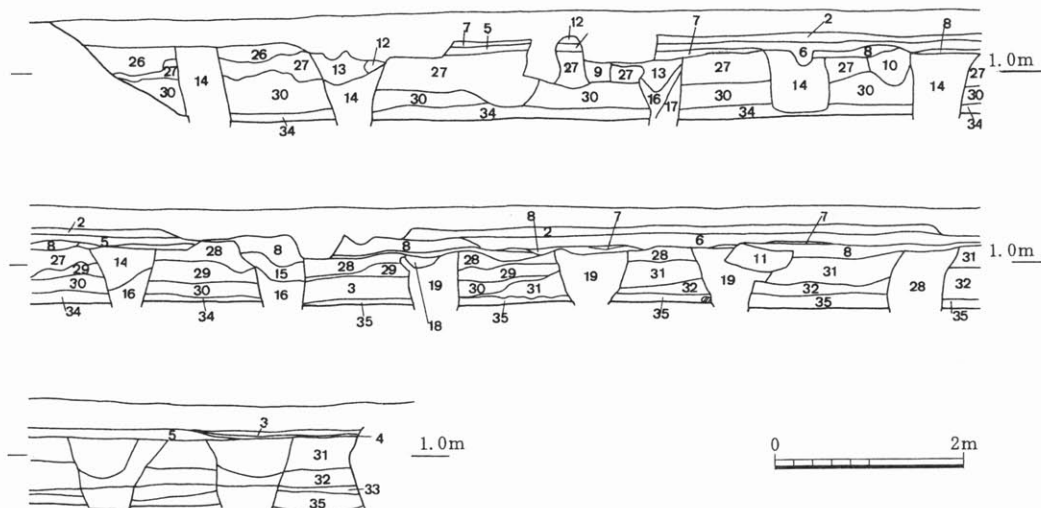
調査区北部では標高1.1m前後まで、調査区南部では標高0.5m前後まで現代の攪乱が及んでいる。北部ではその下に茶灰色砂質土や茶黄色粗砂が堆積しており、遺構はこの下の淡灰色細砂や灰青色シルトの上面から掘り込まれている。

溝SD2 14-3区を南北に貫く素掘り溝である。幅約1.1m、深さ約0.5m前後を測る。掘削直後に洪水で一旦埋没したが、幅約0.7m、深さ0.2mの規模でほぼ同位置に掘り直されている。北部の10m程は幅約0.6m前後に縮小し、深さも0.15m前後と浅くなっている。再掘削前の溝はこの部分には及んでいなかった可能性が高い。掘り直された溝の底には炭化物と腐植土を含む層があり、この層から多数の遺物が出土した。遺物には被熱したものが含まれるうえ、同一個体と思われる破片が離れた場所から出土していることから、火に遭って、割られた後に捨てられたと考えられるものが多い。

この溝を南に延長した方向には13-5区SD506・SX501があり、その南に隣接して虎口二の門の雨落ち溝と考えられるSD502が位置することから、二の門から続く城内道路の西側溝と考えられる。埋土に炭化物を含み被熱した遺物が出土する状況が13-5区SX501と共通すること、両遺構から出土する遺物に接合するものや同一個体とみられるものが複数存在することからも一連の遺構と判断できる。

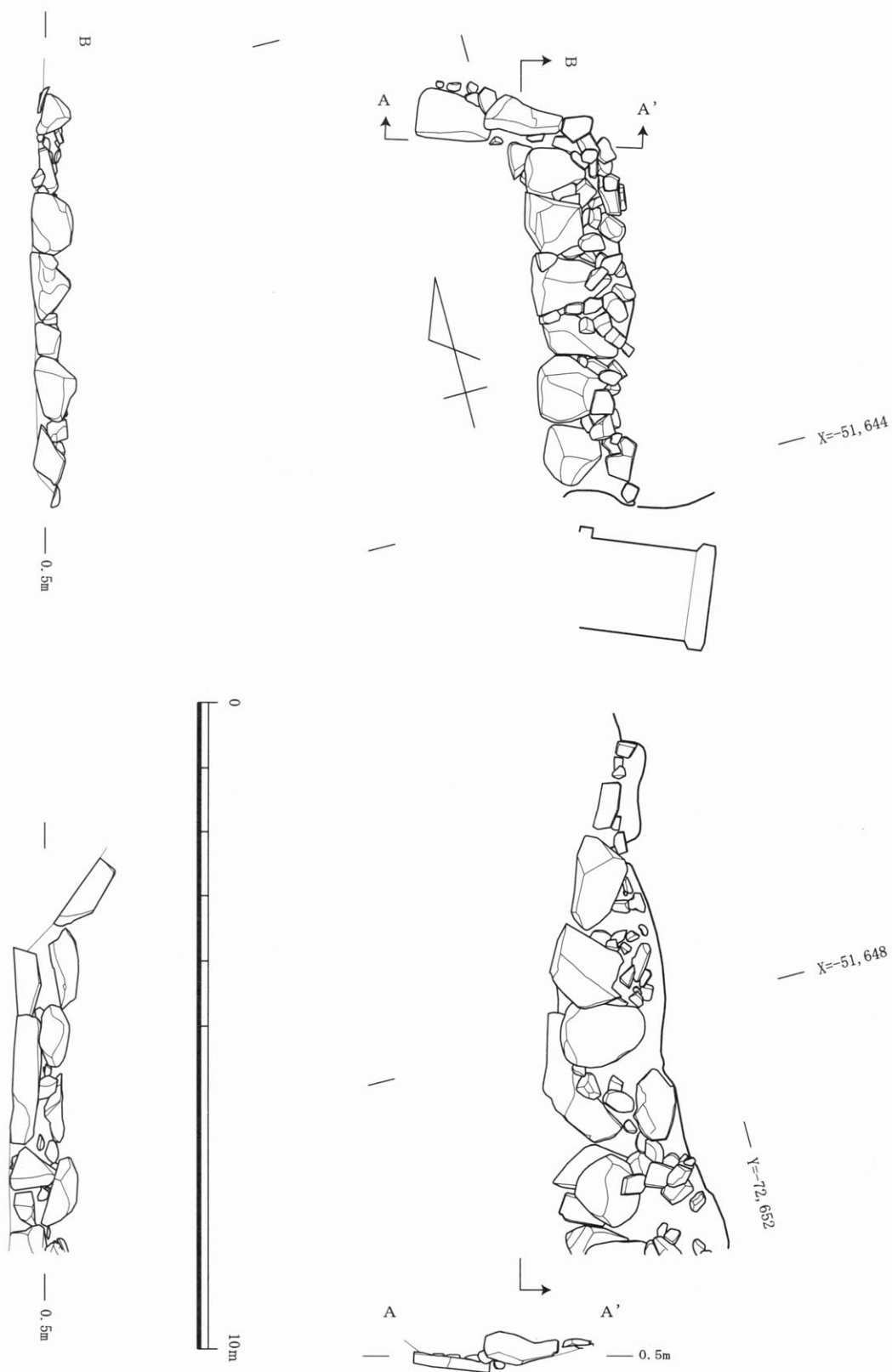
出土遺物には、絵唐津皿・唐津折縁皿・芙蓉手の青花・朝鮮半島製の陶器・漆器碗・下駄などがあり、江戸時代初期、17世紀第2四半期頃に埋没した遺構と考えられる。

溝SD3 SD2の東に平行して検出した素掘り溝である。幅0.7m前後、深さ0.1m前後を測るが、所々でさらに0.2~0.3m深く掘られている。出土遺物は土師器と瓦の小片のみで、埋没時

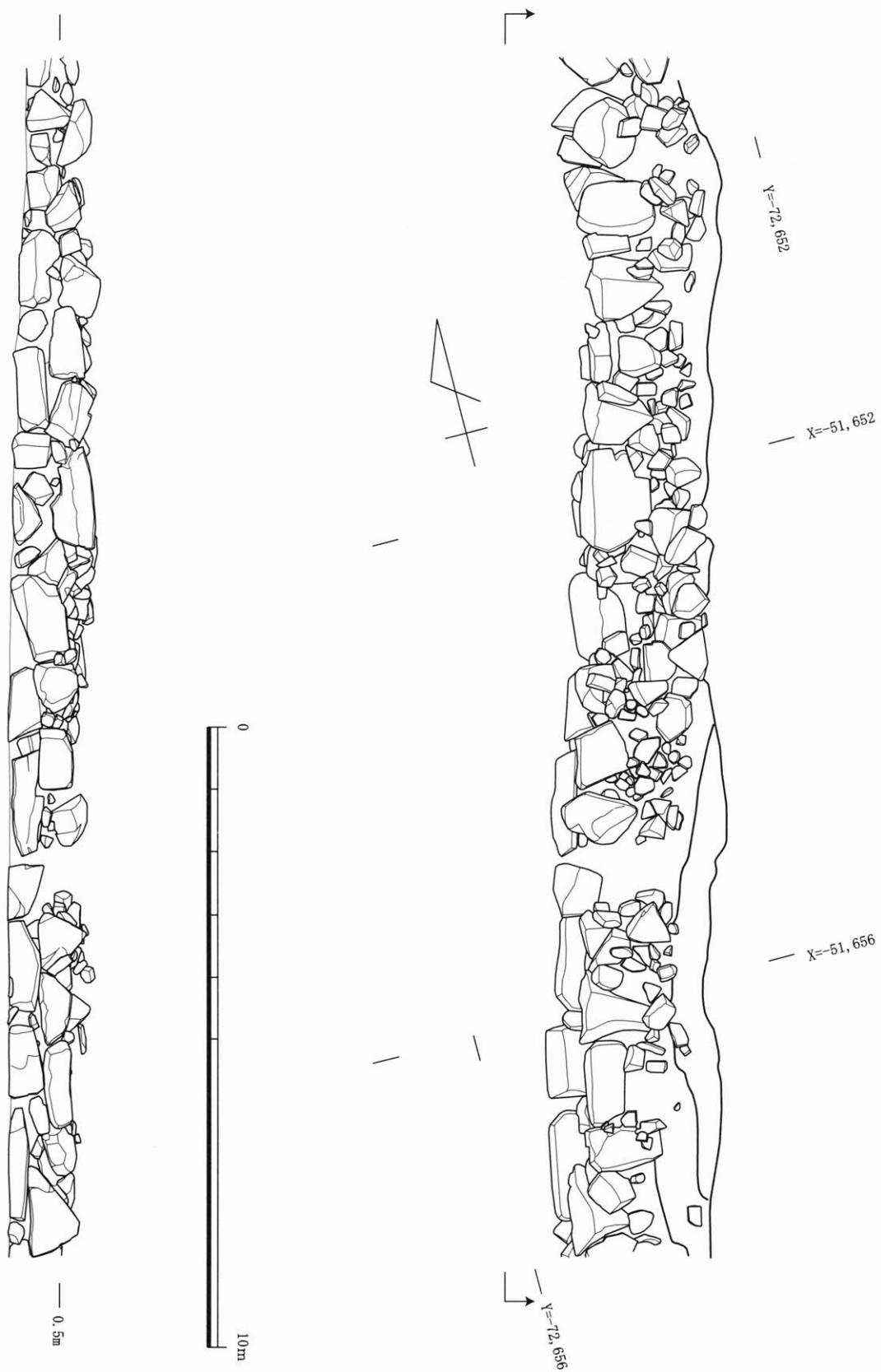


- | | | | | |
|-------------|----------------|-------------|-------------|----------------|
| 1. 現代層 | 2. 淡灰色砂質土 | 3. 暗茶黄色砂質土 | 4. 暗灰色砂質土 | 5. 灰黄色砂質土 |
| 6. 黄白色砂 | 7. 暗茶色粘質土 | 8. 灰色砂質土 | 9. 明黄灰色砂質土 | 10. 暗灰茶色粘質土 |
| 11. 淡灰色砂質土 | 12. 白色粗砂 | 13. 暗茶褐色粘質土 | 14. 淡灰茶色砂質土 | 15. 灰色砂質土 |
| 16. 明茶色粘質土 | 17. 暗茶灰色粘質土 | 18. 淡灰色粘質土 | 19. 灰茶色粘質土 | 20. 暗灰色砂混じり粘質土 |
| 21. 黄灰色砂質土 | 22. 茶黄色礫混じり粘質土 | 23. 茶褐色砂質土 | 24. 暗褐色砂質土 | 25. 淡褐色灰色粗砂 |
| 26. 黄茶色砂質土 | 27. 灰茶色砂質土 | 28. 明灰黄色砂質土 | 29. 暗灰茶色砂質土 | 30. 暗茶灰色砂質土 |
| 31. 明黄茶色砂質土 | 32. 明茶黄色粗砂 | 33. 茶灰色砂質土 | 34. 茶黄色砂質土 | 35. 灰青色シルト |

第20図 14-2区東壁土層断面図



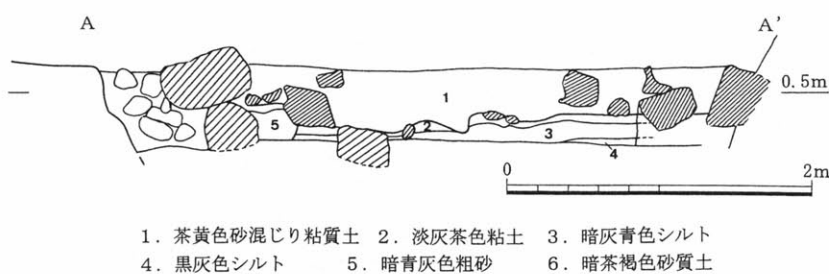
第21図 14-2区石垣S X19実測図(1)



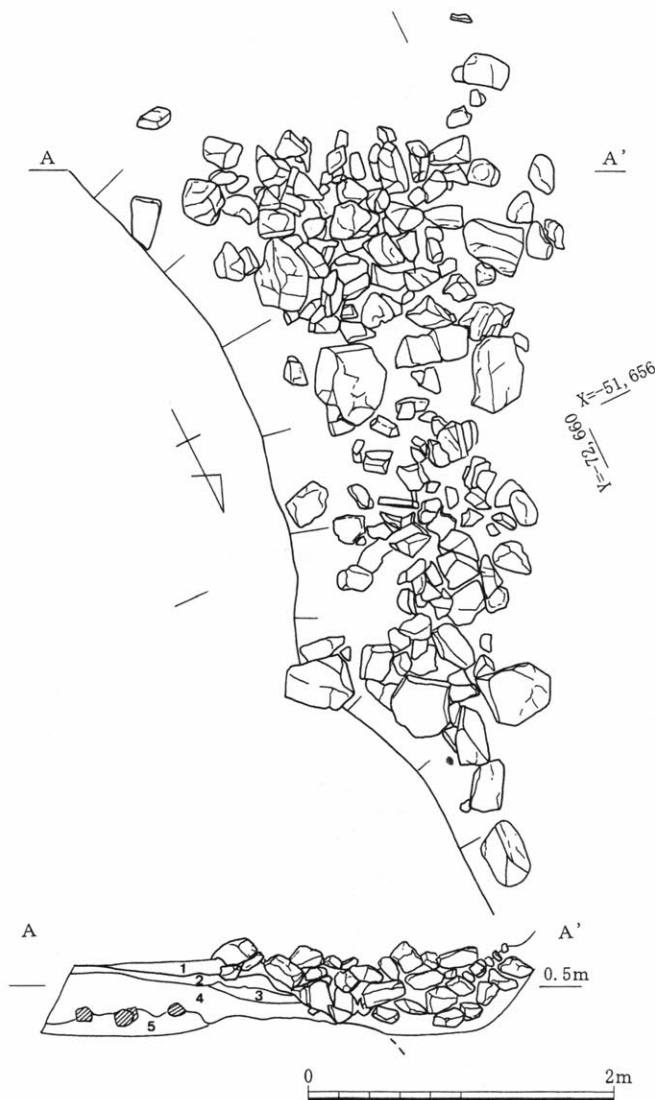
第22図 14-2区石垣S X19実測図(2)



第23図 14-2区石垣S X19実測図(3)



第24図 14-2区石垣S X19断面図



第25図 14-2区石垣S X25裏込め実測図

2.5cm、長さ約120cmの縦板27枚を組み合わせて直径約1mの井筒を作り、その上に花崗岩の割石の石組井筒を載せる。石組は1段分残っていた。井筒内から多量の瓦と陶磁器が出土した。湧水が激しく、底まで掘削することはできなかったため、底の状況は不明である。江戸時代末期頃の遺構と考えられる。

(2) 出土遺物

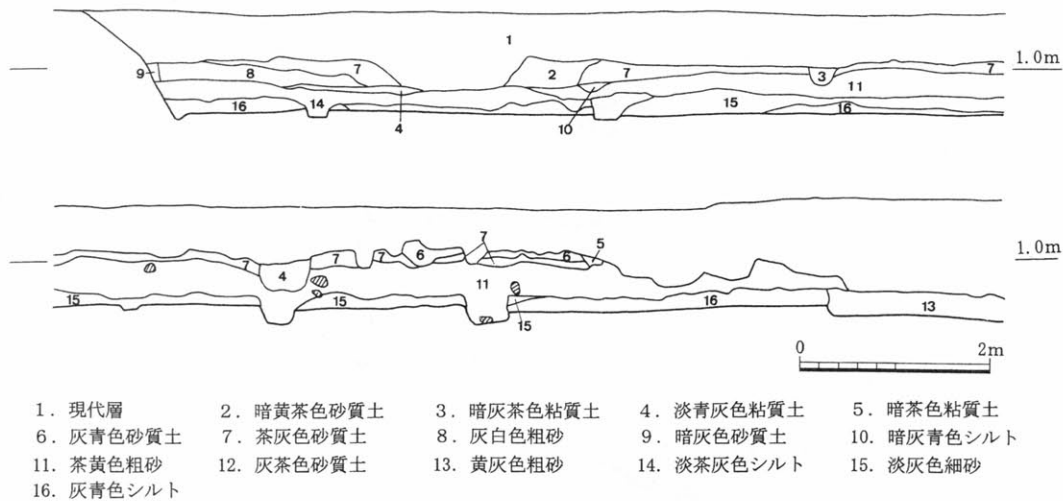
期は不明である。埋土に炭化物などを含まないことから、SD2と同時に埋没したものとは考えられず、SD2とは異なる時期の道路側溝とみられるが、先後関係はわからない。

溝SD4 調査区北部で検出した東西方向の溝である。あるいは土坑かもしれない。幅1.6~2.0m、深さ0.15mを測る。埋土は淡灰色砂質土である。遺物は出土しなかった。

溝SD5 調査区北部で検出したSD2に平行する素掘り溝である。長さ11.5m分を検出した。幅0.7m前後で、深さは最も深いところでも0.15mと浅い。埋土は茶黄色粗砂である。SD2・3と同様に、道路側溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

溝SD7 調査区北部で検出したSD2に平行する素掘り溝である。延長16m余りを検出したが、途中で浅くなって途切れている部分がある。深さは最大0.1m程度で浅い。埋土は黄灰色粗砂である。SD3に切られている。SD2・3・5と同様に、道路側溝と考えられる。遺物は出土しなかった。

井戸SE6 14-3区南部で検出した井戸である。幅7~20cm、厚さ約

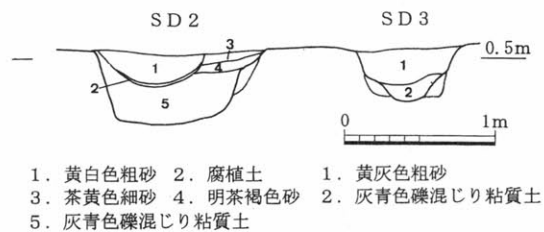


第26図 14-3区東壁土層断面図

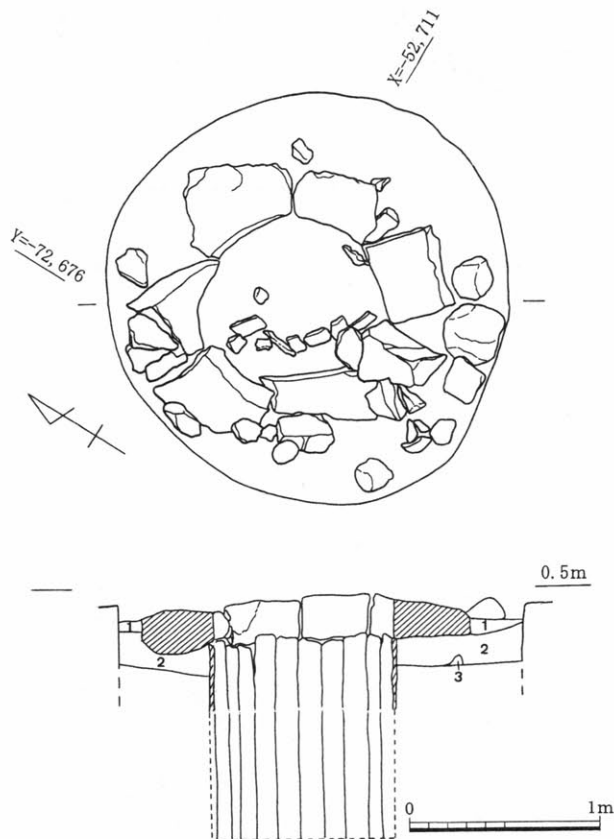
①土器類

13-5区 S X 501 (第29図 1~17・図版第17・18) 1~4は青花である。1は饅頭心タイプの碗、2は芙蓉手の皿、3・4は小杯である。3の畳付以下は露胎である。5は茶入れである。外面から口縁部内面のやや下がったところまで釉薬が掛かるが、火を受けて溶けていて、発色はわからない。黒色の胎土は緻密でよく焼け締まっている。6は耳壺である。外面にオリーブ緑色の釉薬が掛かるが、内面は露胎である。黒色や白色の微細粒を含む緻密な胎土で、中国産と思われる。輸入陶磁器には図化した以外に、芙蓉手の鉢(A)、型押しで口縁部を稜花に作る白磁鉢(B)、長胴壺の胴部と思われる破片(C)、朝鮮半島産の甕(D)などがある。Cの外面は強い火を受けて釉薬が溶けているが、内面は茶褐色の釉薬が残っている。破断面には漆継ぎの痕跡が認められる。

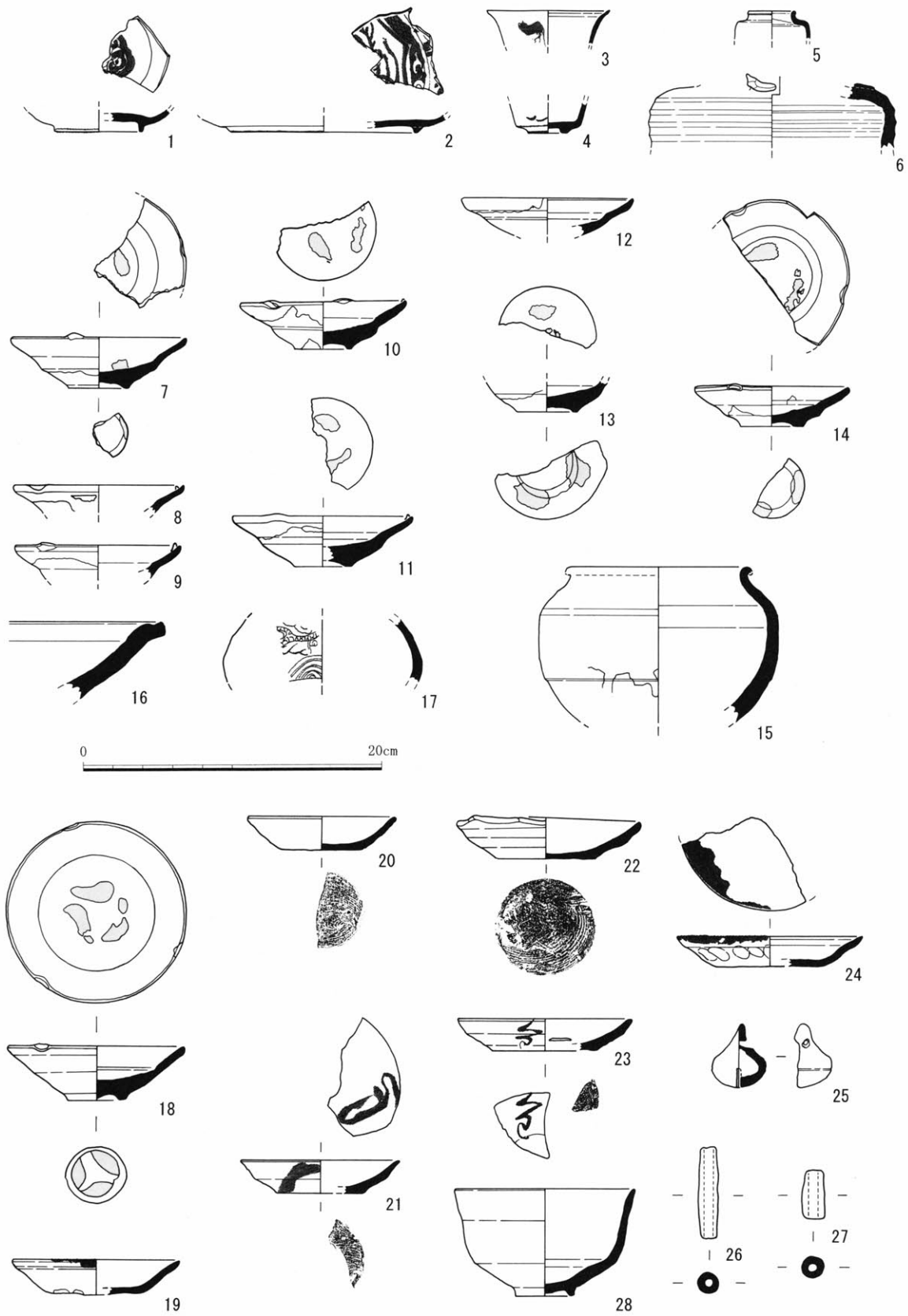
7~15は肥前陶器である。7~14は砂目の皿で、いずれも輪花である。7・8はオリーブがかった透明釉に細かな貫入が入る釉調が共通しており、同一個体の可能性がある。10は14-3区 S D 2 出土の破片と接合した。



第27図 14-3区溝SD 2・3断面図



第28図 14-3区井戸SE 6実測図



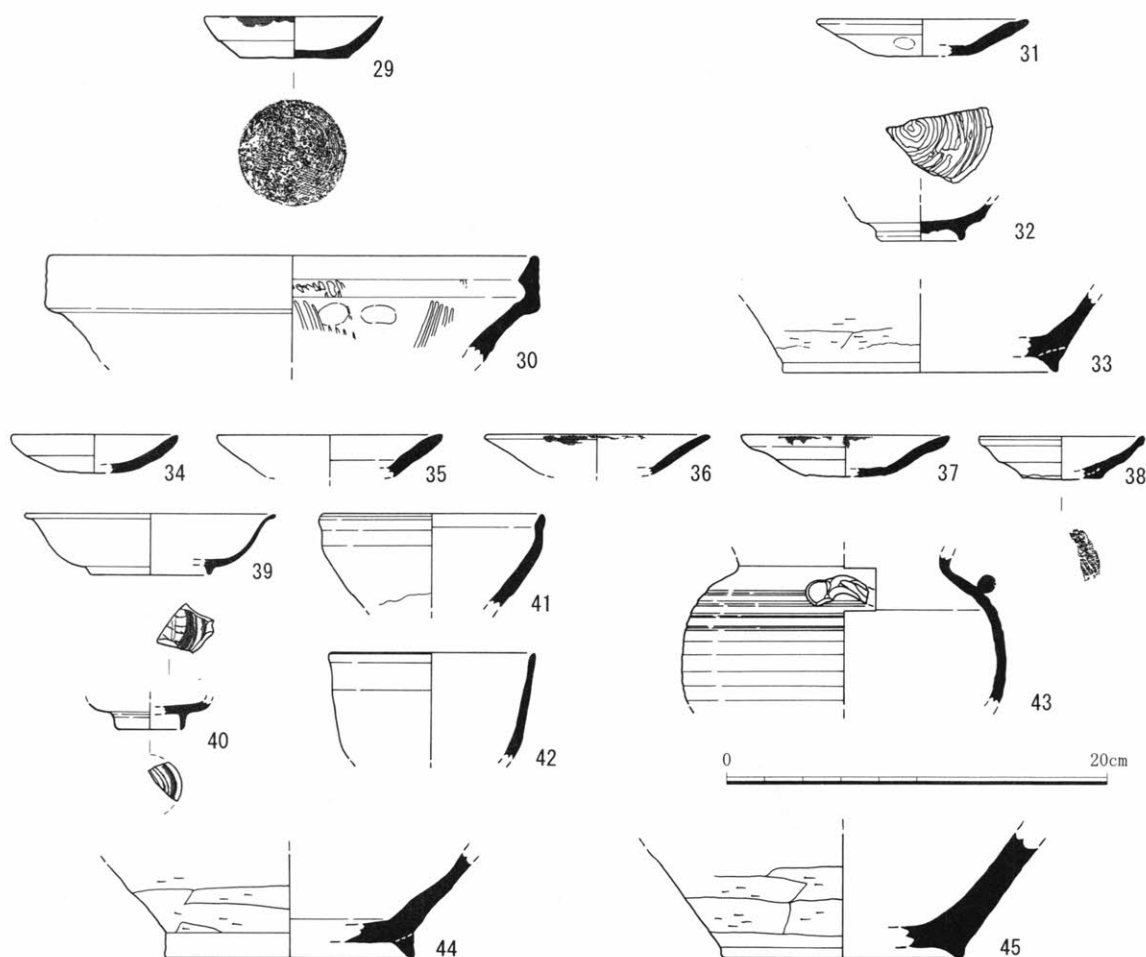
第29図 13次調査出土土器実測図

15は壺である。内面全面と外面上半に施釉されている。破損後に火を受けて破断面の一部が黒化している。16は丹波焼鉢である。接合しない破片が多数出土している。17は肥前磁器徳利である。雲龍文の雲と龍の胴体は陽刻で、龍の足かと思われる部分は陰刻で、水波文は染付で、火焰文は上絵付けで表現している。

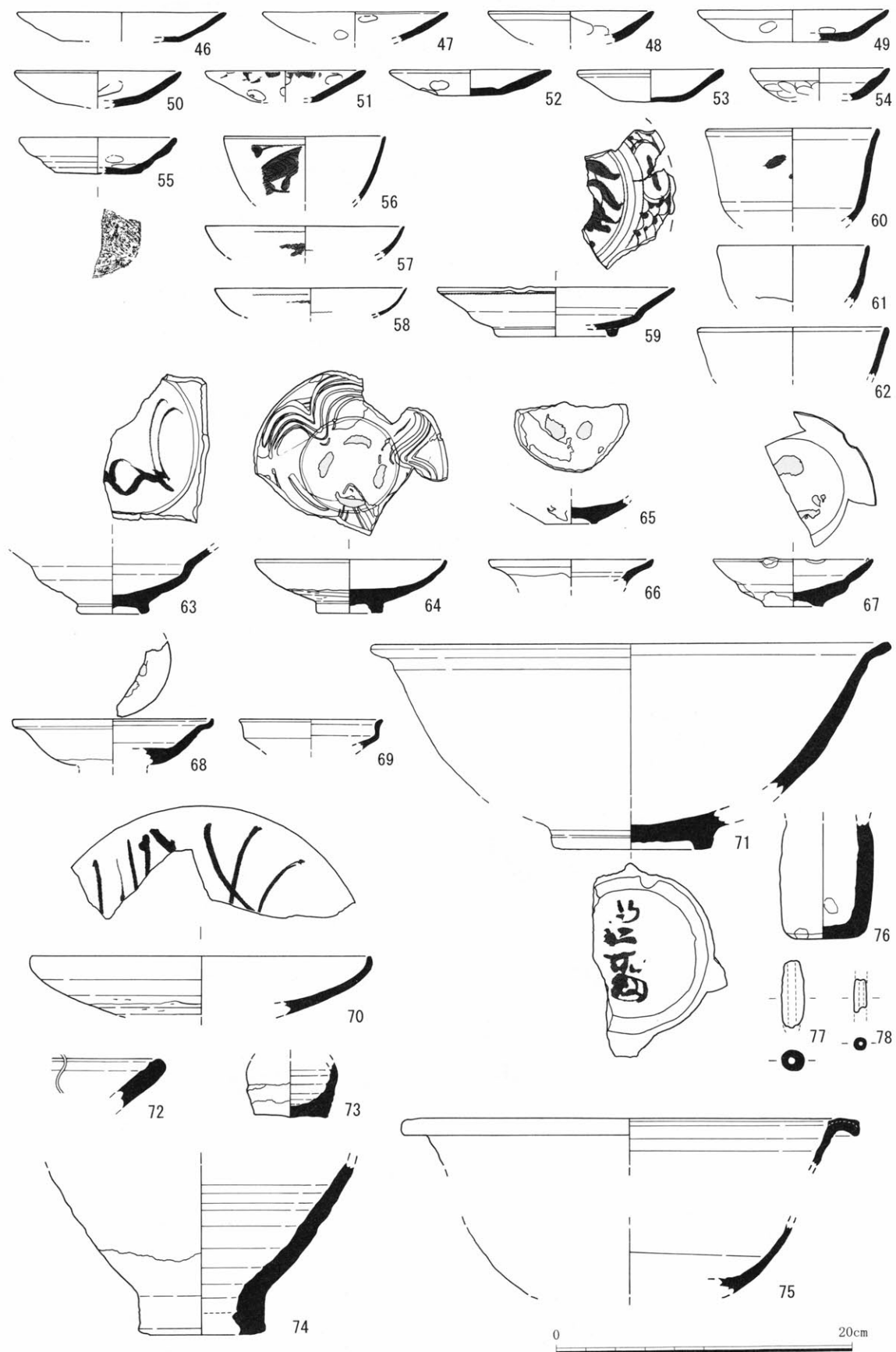
13-2区(第29図18~23) 18はS K205から出土したほぼ完形の肥前陶器輪花皿である。19は石垣上面で出土した手づくね成形の土師器皿である。口縁部の立ち上がりの屈曲が強く、口縁部上半がわずかに外折する。口縁端部に油煙痕が認められる。20~23は回転台成形の土師器皿である。20~22は石垣東側の石垣を埋めた層から出土し、23は北端部の石垣裏込めから出土した。いずれも底部回転糸切りで、口縁部に油煙痕がみられる。22の口縁端部はヘラで波状に面取りされている。23の外面には「色」と読める墨書がある。

13-3区(第29図24) 遺構精査中に出土した手づくね成形の土師器皿である。広い底部から緩やかに立ち上がる口縁部の上半が、外面の指押さえによってやや屈曲する。口縁端部に油煙痕が認められる。

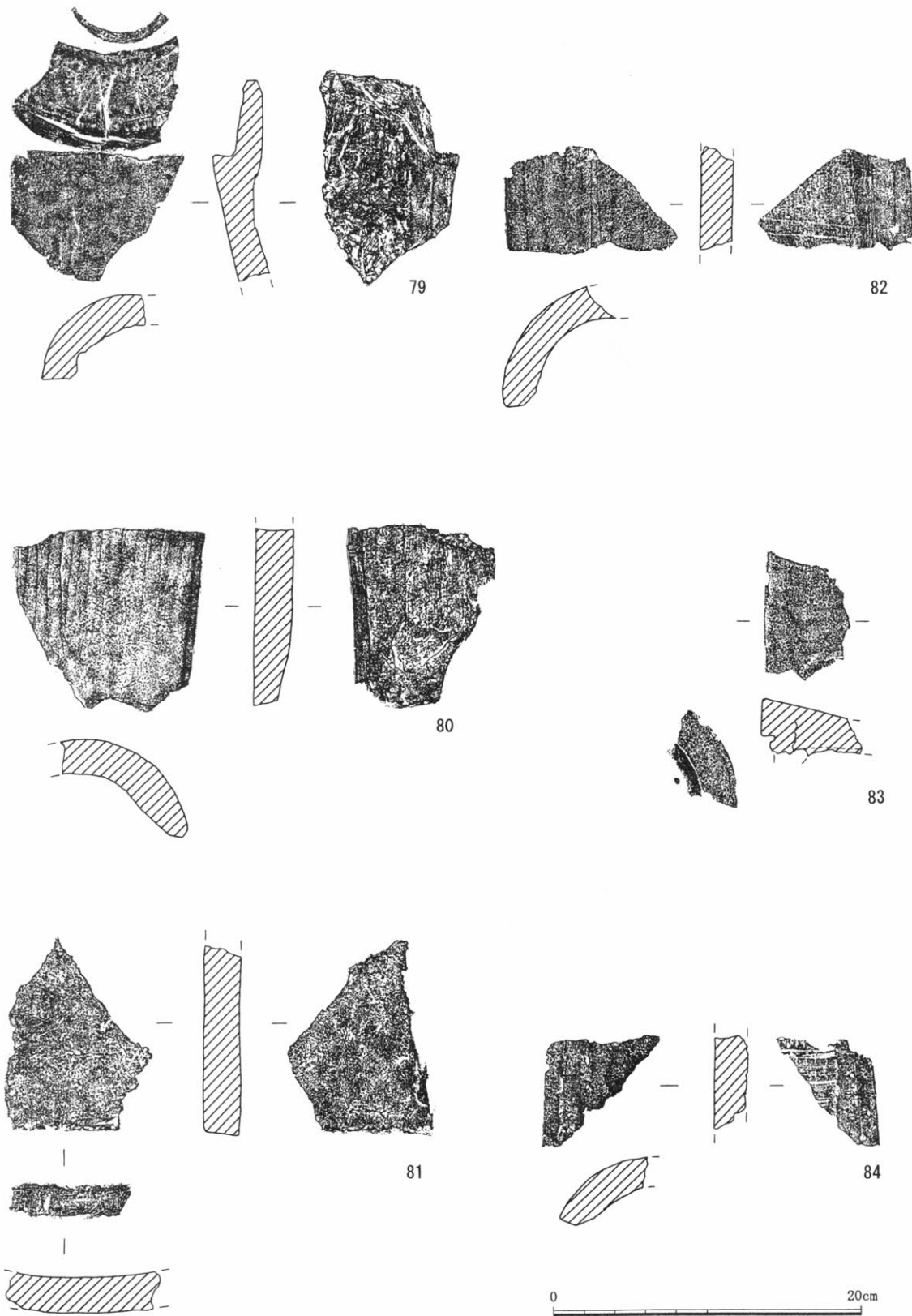
13-4区(第29図25~27) 25は土鈴、26・27は土錘である。いずれも集石土坑S X404の周辺から出土した。



第30図 14-1・2区出土土器実測図



第31図 14-3区出土土器実測図

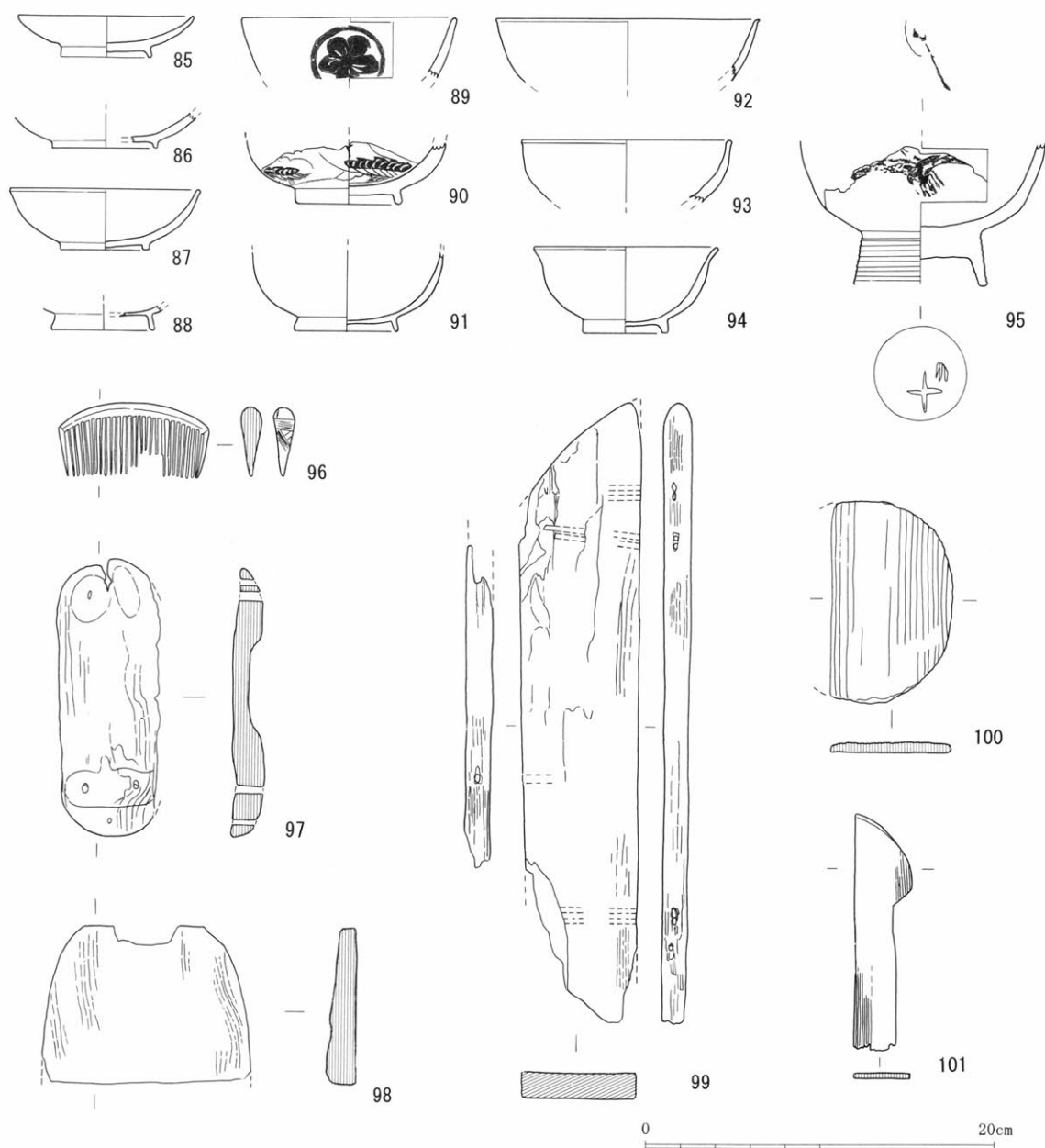


第32図 14-2・3区出土瓦実測図

13-5区(第29図28) 調査区東端の側溝を掘り下げ中に出土した肥前陶器碗である。胎土は赤茶色で淡緑灰色の釉薬が掛かる。畳付以下は露胎である。

14-1区(第30図29・30、図版20) 29・30は石組溝下の構築以前の層から出土した。29は回転台成形の土師器皿である。底部には、回転糸切りの後のハケメ状の細かい平行線の痕跡がついている。30は備前焼すり鉢である。7条1単位の櫛描きのすり目が施される。

石垣S X 3の前面(西北側)を埋めた層から出土した遺物は写真を掲載した。Eは肥前磁器鉢である。蛇の目凹形高台で、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、端部を外側に折り返す。内面には青磁釉が掛けられ、外面は染付である。焼継ぎの痕跡が認められる。Fは丹波焼徳利である。口縁部に鉄釉を掛け、頸部から体部に鉄釉を装飾的に流し掛けしている。Gは信楽焼鉢である。外面



第33図 13次調査出土木製品実測図(1)

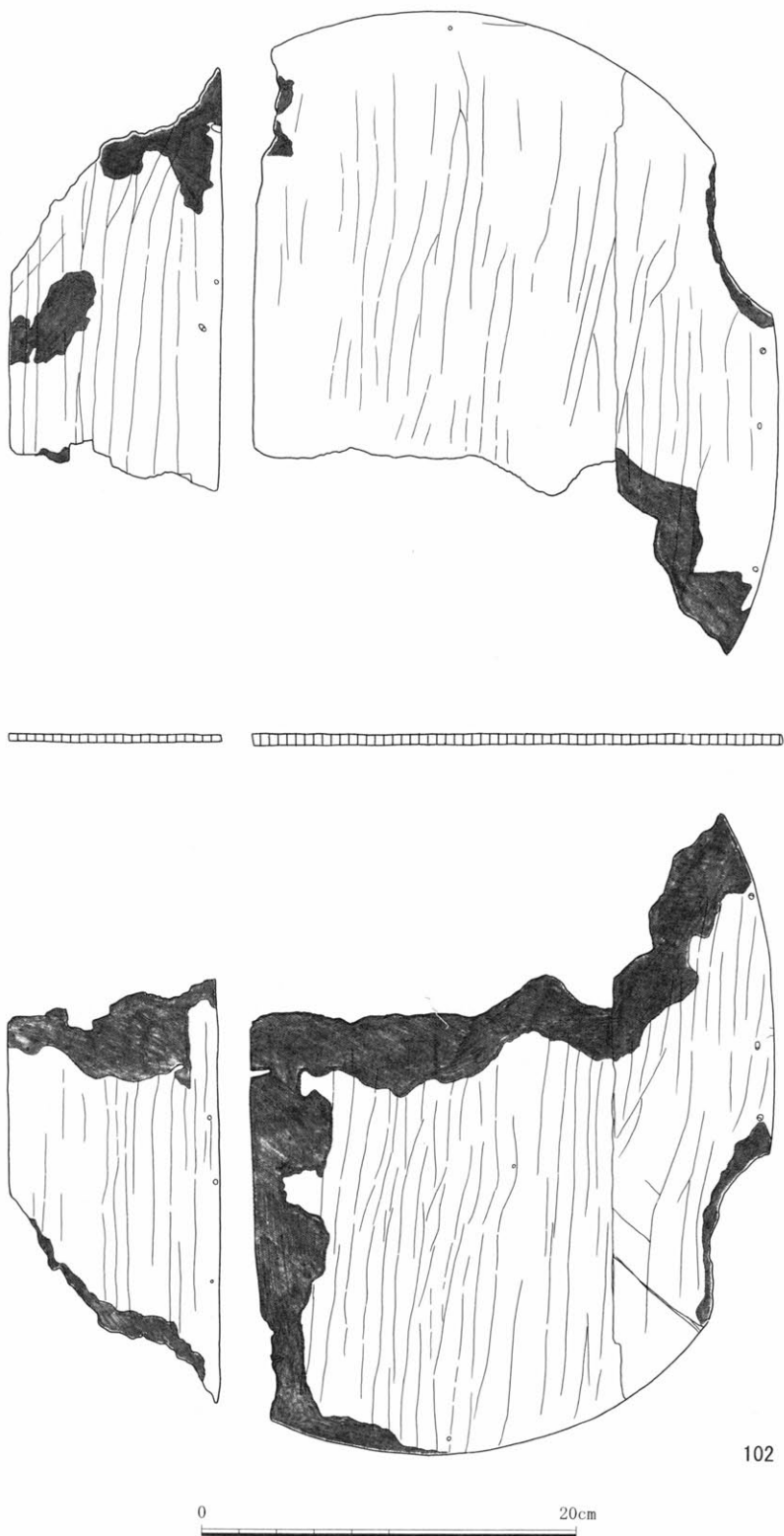
に長石粒が良く目立つ釉薬を掛けているのに対して、内面は白っぽい釉薬を掛けて長石粒が目立たないようにしている。

14-2区(第30図31~45) 31は手づくね成形の土師器皿である。口縁部立ち上がり部に凹線状の圈線が巡り、口縁端部はやや尖り気味に終わる。32は朝鮮王朝陶磁小深碗である。^(注2)内面に白土を掛けて拭っており、轆轤成形時にできた窪みに白土が残って渦巻状に見える。釉薬は全面に掛けられている。33は越前焼鉢である。外面を回転ヘラケズリした後、高台を貼り付けている。胎土は白色粒を多く含み、やや粗い。31・32は石垣S X 19前面の掘形から、33は石垣S X 19の裏込めから出土した。

34~45は石垣S X 19を埋めた層から出土した。34~37は手づくね成形の土師器皿である。35~37は口縁部がやや外反気味に延び、口縁部の立ち上がり部には凹線状の圈線が巡る。36・37には油煙痕が認められる。38は回転台成形の土師器皿である。底部に回転糸切り痕が認められる。39は白磁皿、40は青花碗である。41は瀬戸・美濃産の天目茶碗である。サビ釉はなく、黒色の鉄釉が掛けられているが、強く火を受けており、釉薬がざらついている。42は肥前陶器碗である。灰白色の胎土に乳白色の釉薬が掛かる。43は備前焼の耳壺である。粘り気のある緻密な胎土で硬く焼き締まっている。44・45は越前焼鉢である。外面を回転ヘラケズリした後、高台を貼り付けている。44の内面には重ね焼きの痕跡がみられる。

石垣S X 19を埋めた土から出土した遺物は16世紀代のものが主体で、17世紀前葉のものが混じる。44・45は、裏込めから出土したものとあわせて、この付近に中世の遺跡があることを示唆するものであろう。

14-3区溝SD2(第31図46~78) 46~54は手づくね成形の土師器皿である。46・47のように口縁部が緩やかに立ち上がるものと49・53のように口縁部が強く屈曲して立ち上がるものがあり、後者が新しい傾向である。色調は46・47が乳橙色、51が灰白色、他が灰茶色を呈する。55は回転台成形の土師器皿である。50は内外面に炭化物が付着している。51は口縁部に油煙痕が認められる。56~59は中国産の青花である。56は碗、57~59は皿である。58は口縁部や破断面に炭化物が付着している。59は陶胎で白濁釉が掛かる。60~71は肥前陶器である。60~62は碗である。60は外面に鉄絵が描かれている。61は内面と外面の上半に緑色の釉が掛かる。外面は厚く掛けられ、下端に釉が溜まっている。63~68は皿である。63は見込みを隅丸方形に作り、鉄絵を施す。外面に炭化物が付着している。64はオリーブ緑色の薄い釉薬の上に白濁する釉薬が波状に施されているが、釉薬が掛からず、赤茶色の素地が見えている部分がある。4か所ある砂目の表面がていねいに研磨されていることは他の皿にない特徴である。65~67は13-5区土坑S X 501で多数出土したものと共通し、第26図10のほかにも同一個体があるかもしれない。68は溝縁皿、69は小皿である。70は大皿である。内面に鉄絵が描かれている。71は鉢である。底部と口縁部から体部の破片があり、接合しないが同一個体と判断した。やや黄色掛かったオリーブ緑色の釉薬が掛かるが、高台脇以下は露胎である。高台内に墨書があるが、判読できない。72・73は丹波焼である。72は大皿、73は壺または徳利と思われる。72は口縁部内面に凹線が巡る。73は外面に濃緑色の釉



第34図 13次調査出土木製品実測図(2)

葉が掛かるが、底部付近と内面は露胎である。74は信楽焼壺である。小さな底部から大きく開く器形で、長石粒を多く含む緻密な胎土をもつ。底部付近を除く外面には、薄い釉葉が掛けられている。接合しない同一個体の破片が13-5区土坑S X 501で出土している。75は朝鮮半島産の陶器鉢である。口縁部と底部付近の破片があり、接合しないが同一個体と判断した。胎土は緻密で灰色を呈する中に黒く細い縞状の模様が見える。タタキ成形で口縁部と体部内面に回転ナデを施す。76は焼塩壺である。輪積み成形の接合部で割れている。底部付近の内面は器表面の剥離が著しい。77・78は土錘である。77は一端がわずかに欠けているだけでほぼ完形であるが、78は両端とも大きく破損している。

14-3区井戸SE6 大量の瓦とともに出土した陶磁器を写真図版で提示した。肥前磁器碗・皿、口縁部に銅緑釉を掛けた端反り形の碗、物飯器、飛び鉋とイッチン描きで装飾した蓋などがある。

②瓦(第32図、図版24・25)

79~81は14-2区石垣S X 19東側の城内道路路面を断ち割った下層から出土した。79・80は丸瓦、81は平瓦である。79・80の外面はていねいなヘラミガキが施され、端部には面取りが施されている。内面にみられる粘土切り離し痕跡はコビキAである。79の内面には吊り紐痕跡が認められる。81の凹面にはヘラミガキが施される。82は14-2区石垣S X 19の裏込めから出土した丸瓦



103

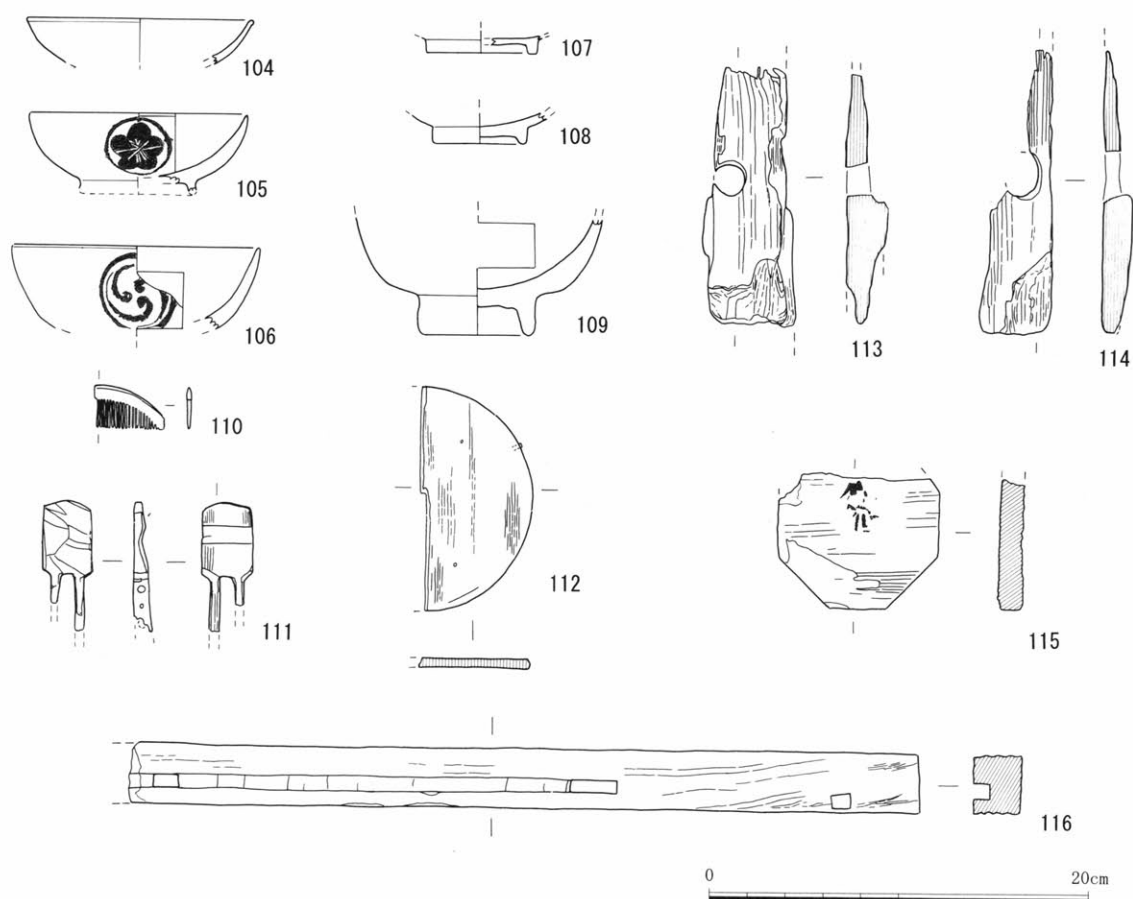
第35図 13次調査出土木製品実測図(3)

である。外面はていねいなヘラミガキが施される。内面にみられる粘土切り離し痕跡はコビキBである。83・84は14-3区溝SD2から出土した。83は軒丸瓦である。瓦当は珠文がひとつだけ残る。瓦当と丸瓦の接合面にはカキヤブリの痕跡がみられる。84は丸瓦である。外面はていねいなヘラミガキが施される。内面にみられる粘土切り離し痕跡はコビキBである。

14-3区井戸SE6、14-2区石垣SX25から出土した瓦類は写真図版に示した。H~LはSE6、MはSX25裏込めから出土した。H・Iは軒丸瓦である。Hは長く伸びる巴文の周りを小さな珠文が巡る。Iは太い巴文の周りを大きな珠文が巡る。J・Kは軒平瓦である。Jは3反転の連続する唐草文がみられ、Kは宝珠文の中心飾に様式化した唐草文がみられる。両者とも顎貼り付け式段顎である。H・Jは江戸時代初期の特徴を備えており、宮津城の瓦と考えられる。Lは隅瓦である。HはSX25裏込め掘削中に出土した軒棧瓦片が、14-2区の中央付近を横切るコンクリート製の排水管の掘形に顔を出していた軒棧瓦と接合するとほぼ完形になることがわかり、併せて採集したものである。全幅28.5cm、瓦当幅約25cm、長さ27.5cmを測り、ほぼ正方形に近い。葺足は約18cmで、約1/3を重ねて葺いていたことがわかる。瓦当文様は宝珠を中心飾とする唐草文である。

③木製品(第33~36図)

第30・31図に示したものは第13次調査で出土した。85は漆器皿、86~95は漆器碗である。無文



第36図 14次調査出土木製品実測図

のものは内外面とも朱漆が塗られ、文様のあるものは黒漆の地に文様が朱漆で描かれている。
85・90～94は一部が焼けている。

96は櫛である。97は下駄である。98は台形の頂部を切り欠いている。用途は不明である。99～102は桶の底板である。99・102は数枚の底板を組み合わせるもので、連結用の穴が開けられている。103は13-1区の溝SD101の竹筒を連結していた部材である。

85～94・96・102は13-5区土坑SX501から、97・100は13-3区石組溝SD301から、95・98・99・101は13-2区石垣SX201の前面を埋めた層から出土した。

第33図に示したものは第14次調査で出土した木製品である。104～108・113・114は14-3区SD2、110・112・115・116は14-3区SE6、111は14-2区SX19を埋めた層から出土した。また、109は14-3区南部でSD2を検出する作業中に出土しており、SD2に伴う遺物と思われる。

104は漆器皿、105～109は漆器椀である。無文のものは内外面とも朱漆が塗られ、文様のあるものは黒漆の地に文様を朱漆で描かれている。106以外は焼けている。100は櫛である。ツゲ製と思われる。111はミニチュア三味線の棹である。海老尾から糸蔵の上半部までが残っている。糸蔵の側面には糸巻を差し込む穴が開けられている。穴は糸巻きを挿し込む側が大きくなるので右側面の穴は大・小・大の順に並び、一番下の三の糸巻きが挿し込まれる穴で割れている。左側面は一の糸巻きの先が嵌まる穴で割れている。112は桶の底板である。周縁の側面に木釘穴が開けられ、底にも小孔が2か所開けられている。113・114は下駄である。同一個体の可能性がある。115は八角形の板材であるが、用途は不明である。墨書があるが判読できない。116は1面に溝が彫られた角材で、溝の中の2か所に方形の穴が貫通している。端部付近にも正方形の穴があるが、これは貫通していない。建具の一部と思われる。

4. まとめ

17・18年度の調査では、宮津城三の丸南西部の様子が判明した。

14-2区石垣SX19構築以前の層から天正年間に遡るコビキAの瓦がまとまって出土し、細川氏の時代にこの付近に瓦葺の建物が建てられていたことが判明したが、この時期の遺構はみつからない。石垣SX19は裏込めからコビキBの瓦が出土していることから、細川期に遡る可能性はなく、慶長5(1600)年に京極高知が丹後に入ったことを契機に築かれた可能性が高い。宮津城の歴史は、京極高広入城に伴う整備までの間の約20年間の様子がよくわかっていなかったが、京極高知の時代にも石垣を築くなどの一定の整備が行われていたと考えられる。

SX19を埋めた層から出土した遺物が13-5区土坑SX501や14-3区溝SD2の出土遺物よりもやや古い様相を示すことから、SX19が埋められた後にSX501・SD2が掘削されたと考えられる。SX19を埋める大規模な改変が行われた時期としては、京極高広が藩主となって城下の整備を行った元和8(1622)年から寛永2(1625)年を考えるのが妥当だろう。

13-5区土坑SX501、溝SD502・504、14-3区溝SD2などは一連の遺構と考えられる。

特に、13-5区SX501と14-3区溝SD2は、互いに接合する個体をはじめ、同一個体と思われる破片が出土すること、出土遺物に火を受けたものが多いこと、埋土に植物質のものを多量に含む層があることなどが共通しており、同時に機能し、同時に廃絶したとみて間違いない。13-2区石垣SX201の西側の断ち割りで検出された溝も共通する埋土であり、14-3区SD2の延長線上に位置すること、溝底の標高も矛盾しないことから、SD2から続く一連の遺構の可能性が極めて高い。虎口の平面構造が大きく改変されていないと仮定すれば13-5区SD502・504が二の門に相当する門の雨落ち溝にあたる可能性がある。これらの遺構は17世紀第2四半期の遺物を含む土で埋められている。

この後、13-2・5区で検出した石垣SX201をはじめとする遺構が構築される。これらは絵図に見える三の丸南西隅の枡形虎口を構成するものと考えられる。すなわち、石垣SX201が一の門を入った正面の石垣にあたり、土塁SX203・SX507は石垣SX201の両端に取り付く土塁である。門外から目立つ枡形虎口の正面にのみ石垣を使用したものと考えられる。13-2区SA206が枡形を囲む城壁に架けられた土堀である。土堀が掘立柱式であること、この南に隣接する12-1区の調査で石垣が検出されていないことから、枡形を画する城壁の外(南)側面は、絵図では石垣になっているが、枡形内側と同様に土塁であったものと推定される。石垣SX201の基底のレベルが北に向かって高くなっていることから、門に向かって路面が傾斜していたことがわかる。枡形を右に折れたところにある二の門は検出されなかったが、土塁SX507が調査区東端まで続くので、調査区東側の道路の下付近に想定することができる。

この枡形虎口が作られる時期は、京極氏が改易処分を受けた後の寛文7年に行われた修復を候補に挙げることができるが、石垣SX201を埋めた層から出土した回転台成形の土師器皿の年代観が定まっておらず、今後の課題である。

このように、初期の宮津城の遺構は、比較的短期間に改変を繰り返されていることが判明した。

この時期には、藩主も細川藤孝・京極高知・京極高広・永井尚征と藩主がめまぐるしく変わっている。藩主の交代が必ずしも遺構の改変の契機となるものではなかろうが、この時期の宮津城の歴史の解明には遺構の時期を細かく比定してゆくことが不可欠である。(森島)

注1 調査地にあった防空壕については地元の小谷太也氏のご教示を得た。

注2 森本朝子・片山まび「博多出土の高麗・朝鮮陶磁の分類試案」(『博多研究会誌』第8号) 2000。

朝鮮王朝陶磁については東洋陶磁美術館の片山まび氏のご教示を得た。

版 圖



(1) 調査地全景(南南西から)



(2) 調査地全景(北北東から)



(1) 13-1区溝 S D101全景
(南南東から)



(2) 13-2区全景(南南西から)



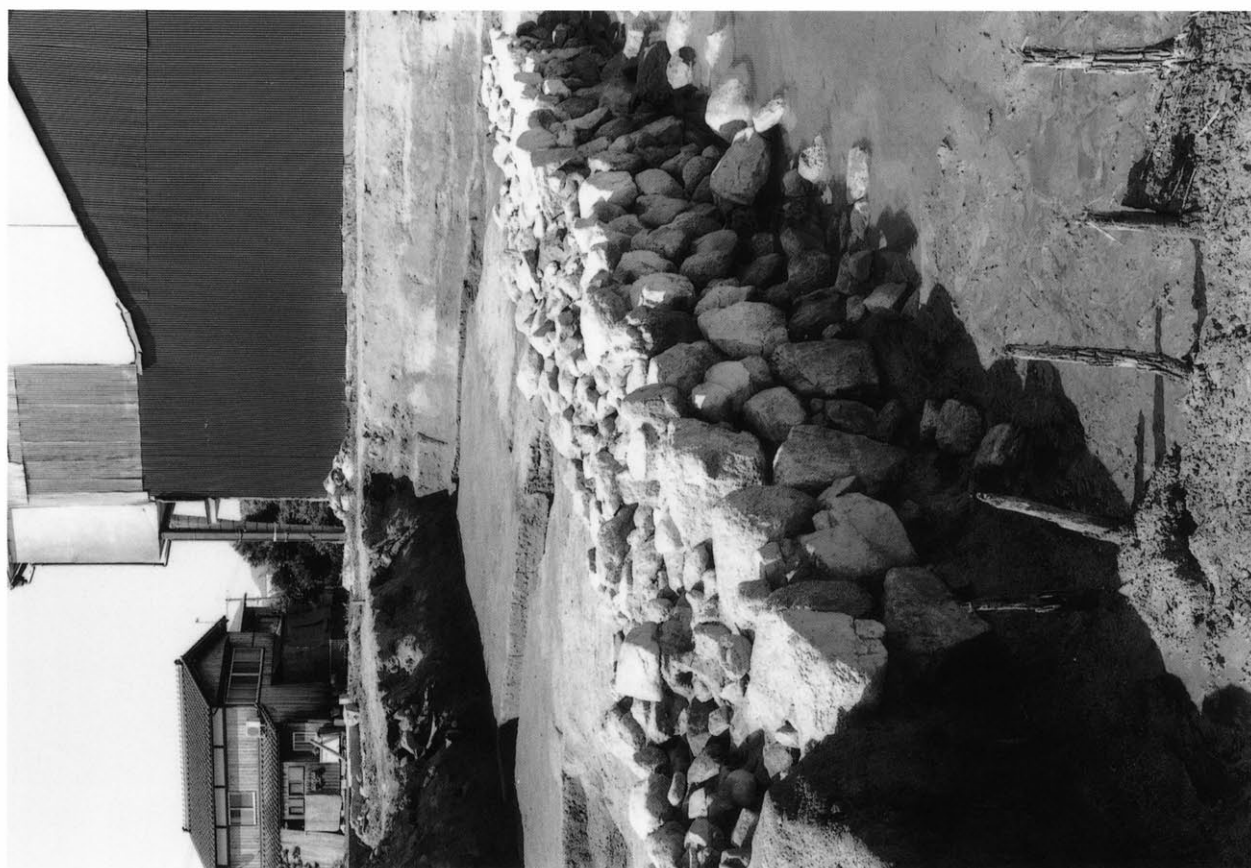
(3) 13-2区全景(東南東から)



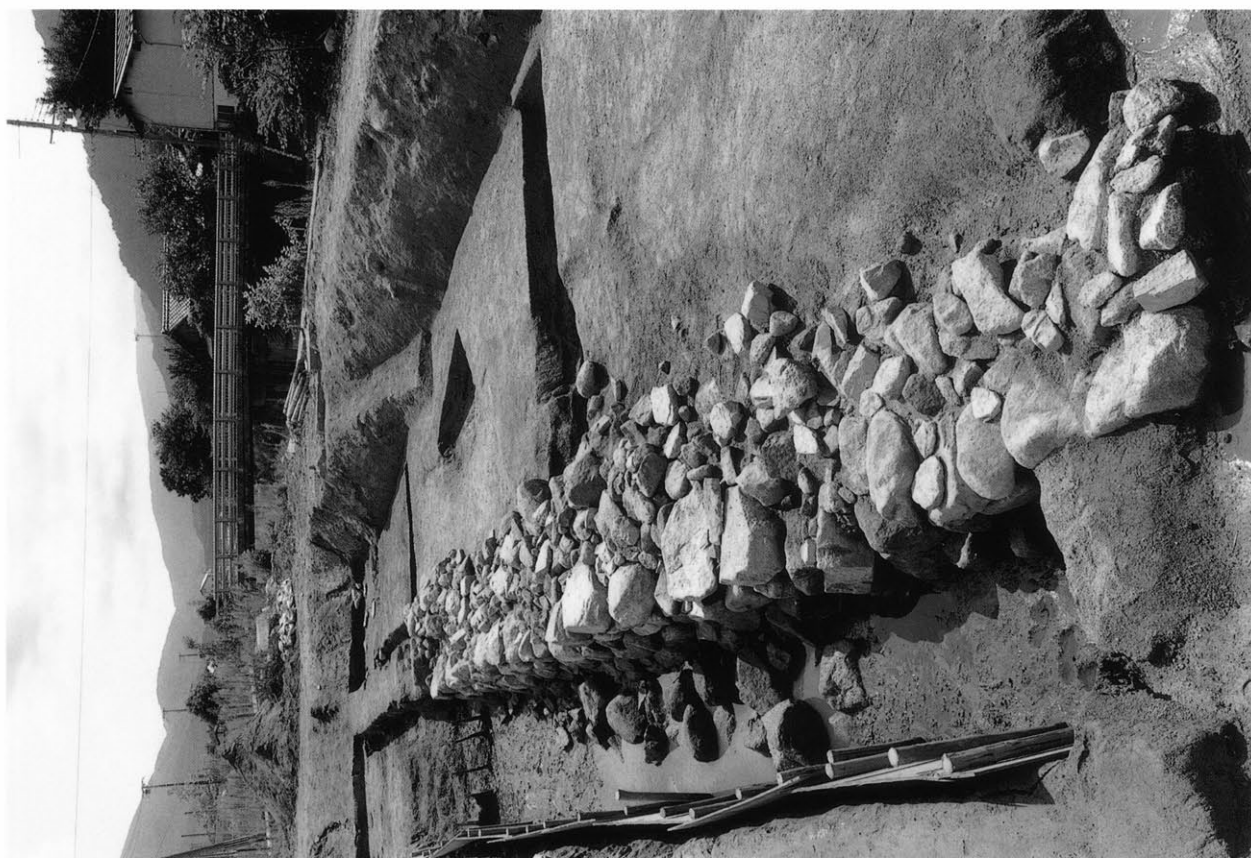
(1)13-2区全景(上が西北西)



(2)13-2区石垣S X 201全景(南から)



(2)13-2区石垣 S X 201 全景 (南から)



(1)13-2区石垣 S X 201 全景 (東北東から)



(1) 13-2区石垣 S X 201・
土塁 S X 203近景(東南東から)



(2) 13-5区全景(南南西から)



(3) 13-5区土坑 S X 501北半全景
(東南東から)



(1) 13-3区全景(上が西北西)



(2) 13-3区石組溝 S D301・302
全景(上が西北西)



(3) 13-3区石組溝 S D302全景
(東南東から)



(2) 13-3 区石組溝 S D 301 全景 (西北西から)



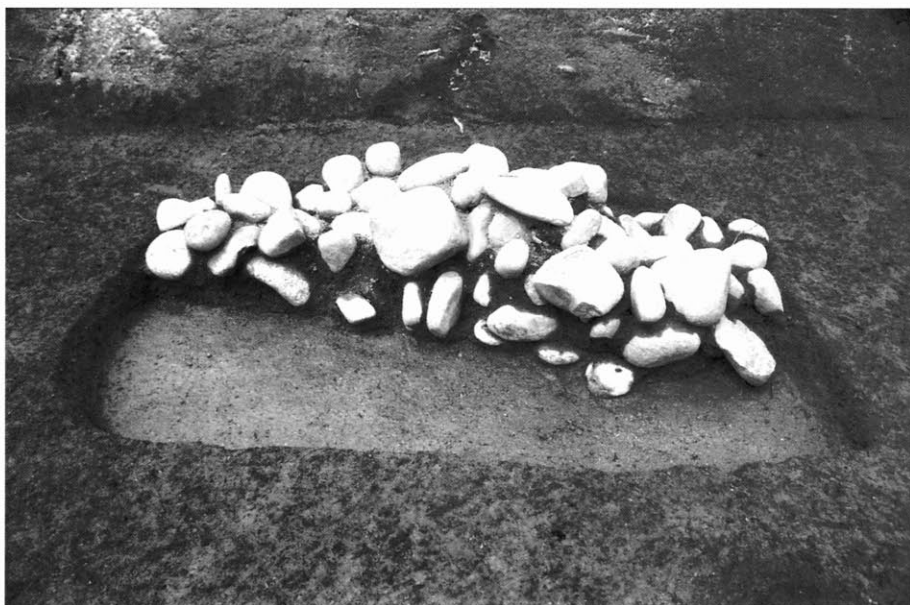
(1) 13-3 区石組溝 S D 301 全景 (東南東から)



(1) 13-4区全景(北北東から)



(2) 13-4区全景(北北東から)



(3) 13-4区土坑S K402全景
(東南東から)

(1)14-1区全景(上が西北西)



(2)14-1区全景(北北東から)



(3)14-1区石垣S X 3
前面堆積状況(南南西から)





(1)14-1区石垣S X 3全景(北から)



(2)14-1区石垣S X 3全景(南西から)



(1)14-1区石垣S X 3 全景(北北東から)



(2)14-1区石垣S X 3 全景(西北西から)



(1) 14-1区石垣S X 3裏込め
掘形(北北東から)



(2) 14-1区土坑SK 4・5全景
(東南東から)



(3) 14-1区石組溝SD 1断面
(南東から)



(1) 14-2区全景(上が東南東)



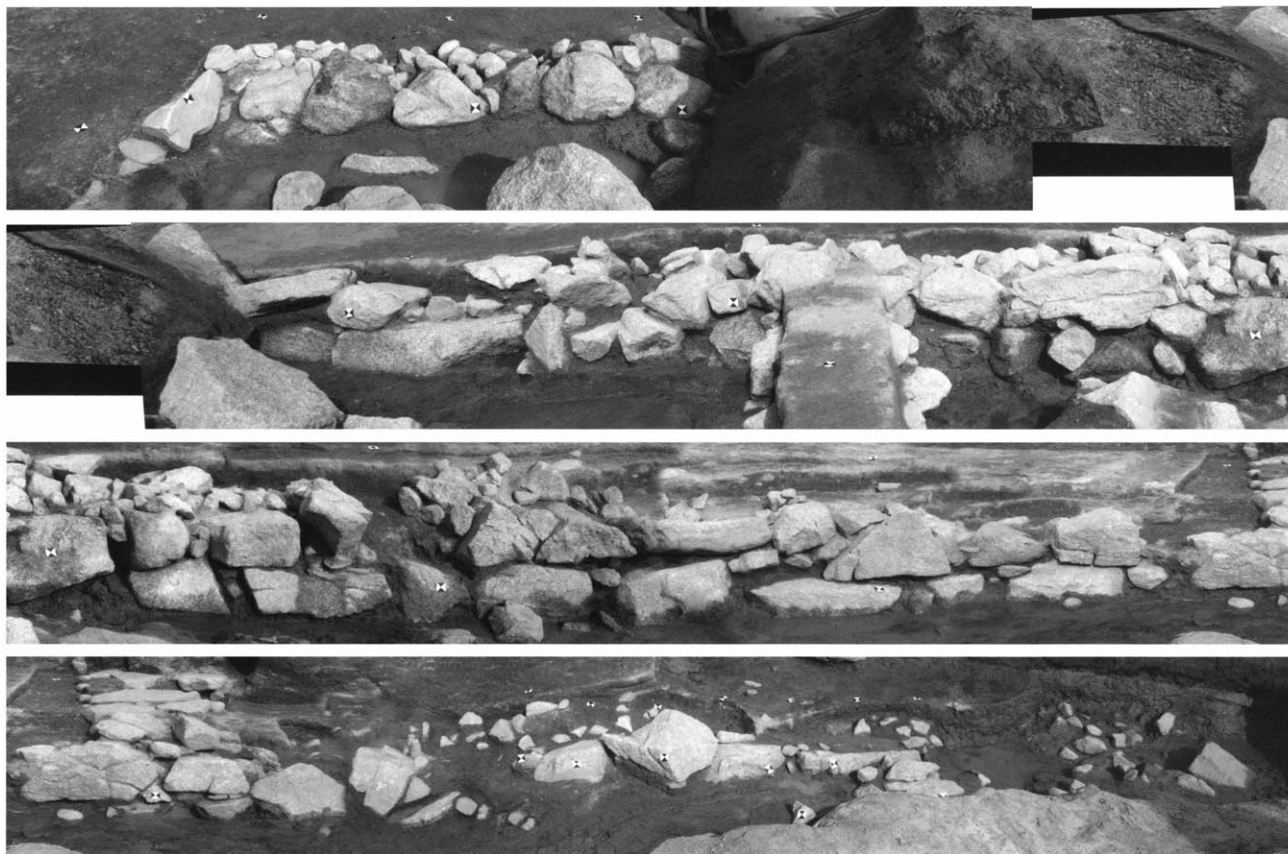
(2) 14-2区石垣S X 19・25全景
(上が東南東)



(3) 14-2区石垣S X 19・25全景
(西北西から)



(1)14- 2区石垣S X19・25全景(南南西から)



(2)14- 2区石垣S X19全景(西北西から)

(1)14-2区石垣S X19
前面堆積状況(北北東から)



(2)14-2区石垣S X25断面
(北北東から)



(3)14-2区土坑S K15全景
(西南西から)





(1) 14-3区全景(上が西北西)



(2) 14-3区溝SD2堆積状況
(北北東から)



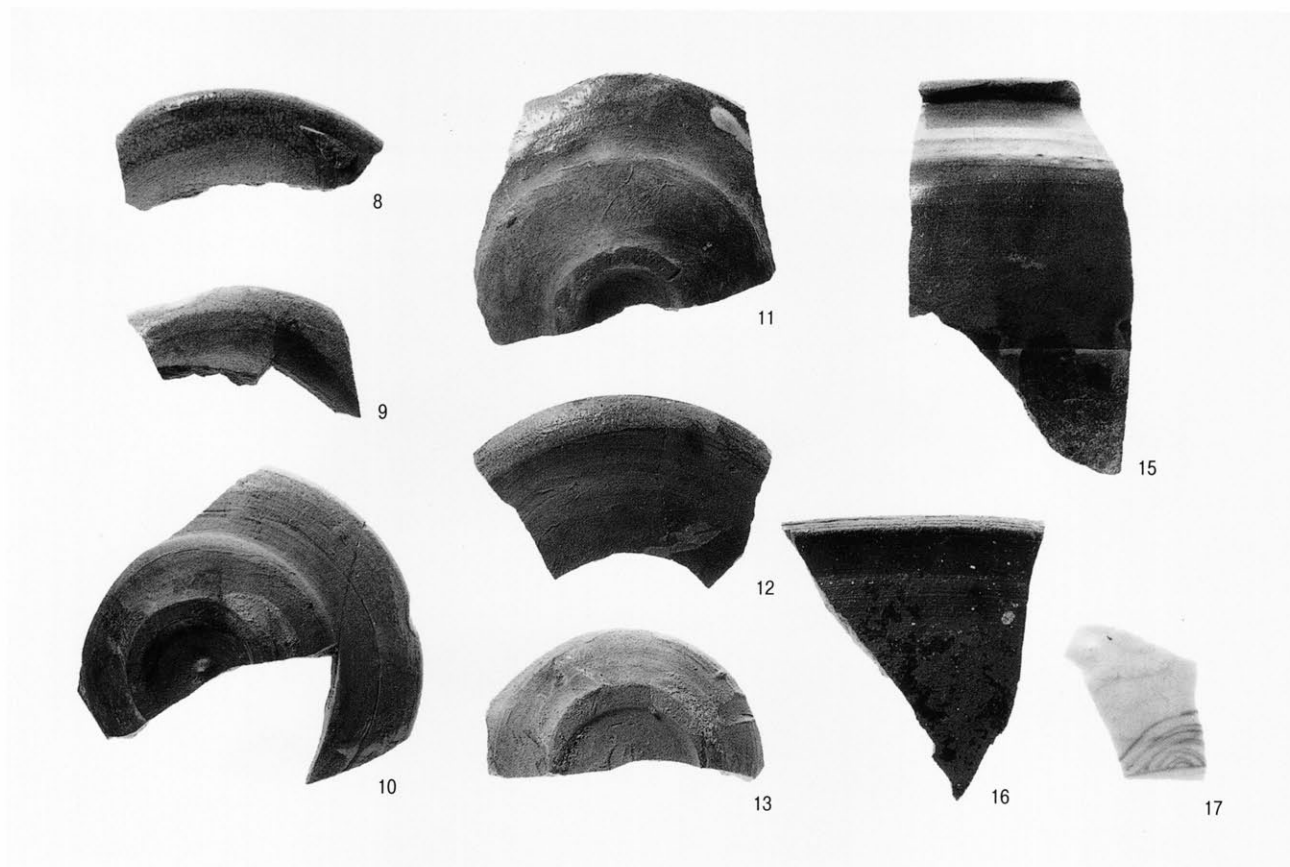
(3) 14-3区井戸SE6全景
(南西から)



(1) 13-5区土坑S X501出土遺物 1



(2) 同上



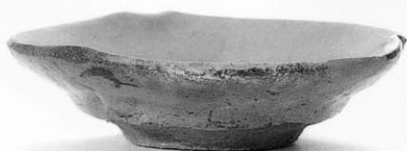
(1) 13-5区土坑S X501出土遺物 2



(2) 同上



7



14



22



28



18

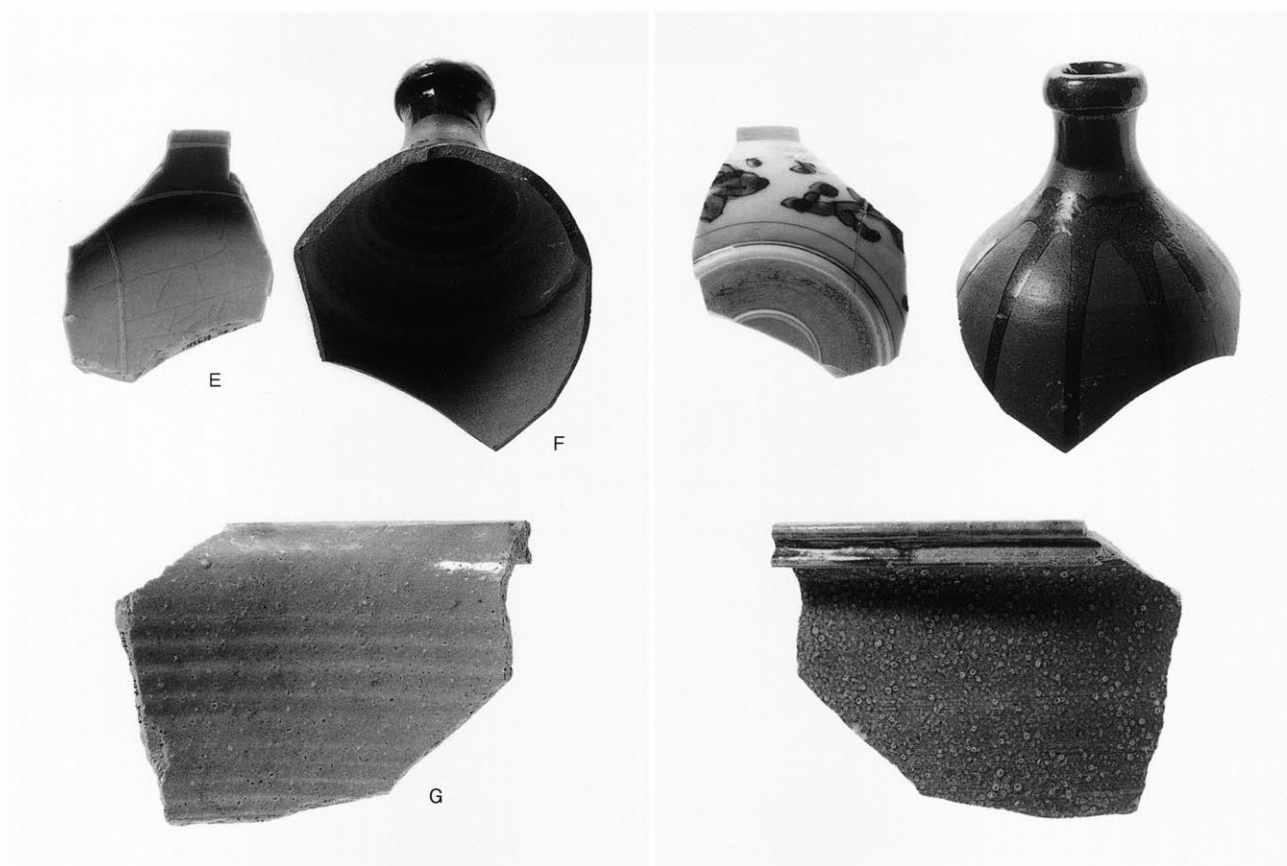


29



30

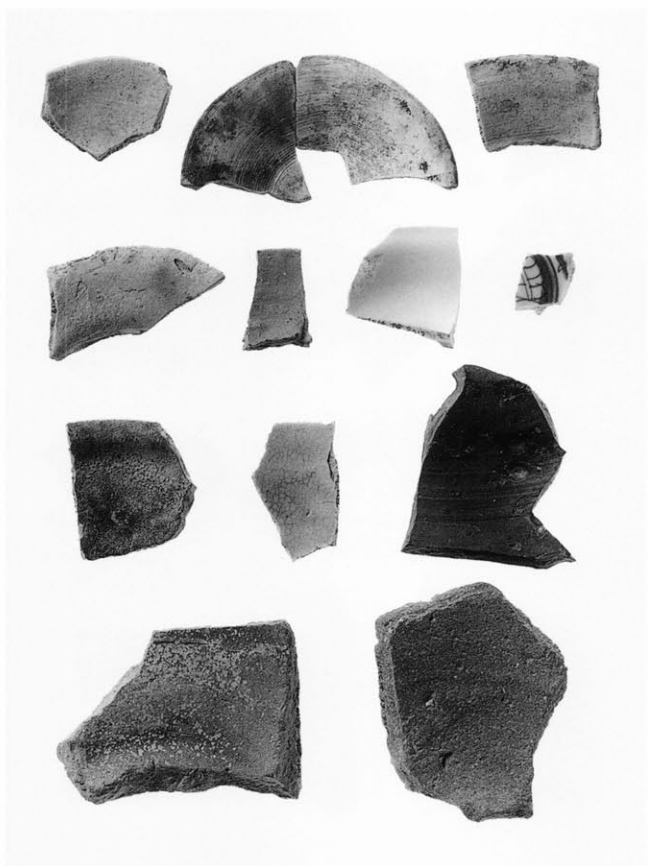
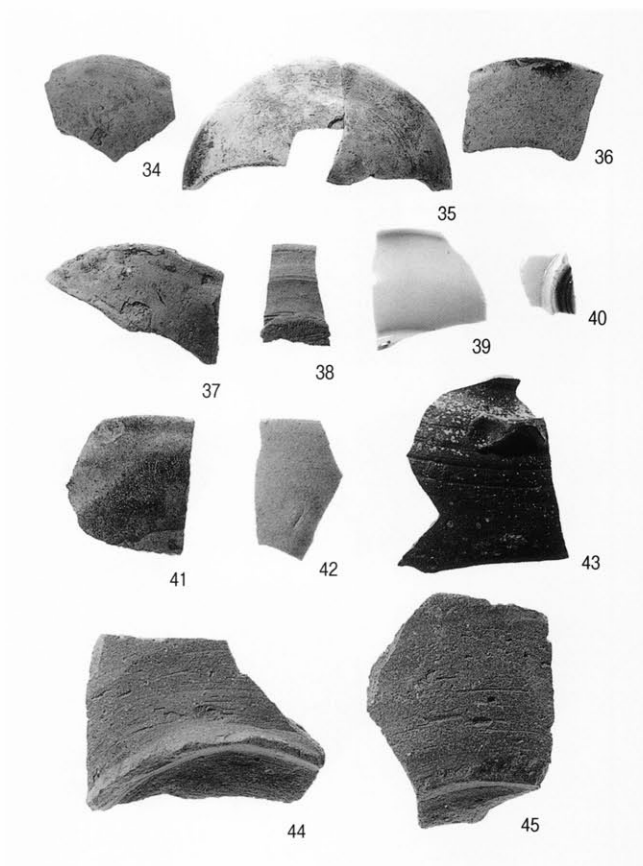




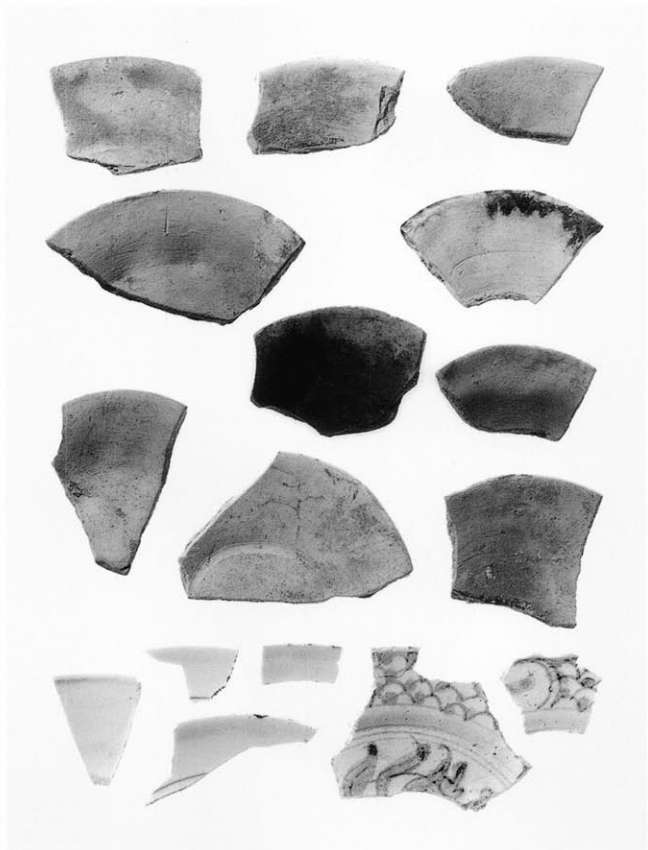
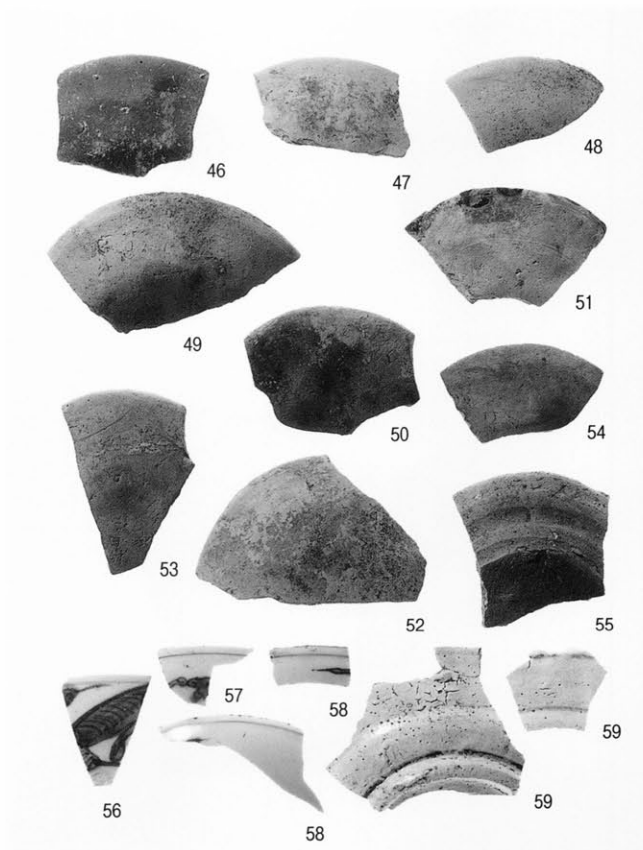
(1)14-1区石垣S X 3前面出土遺物



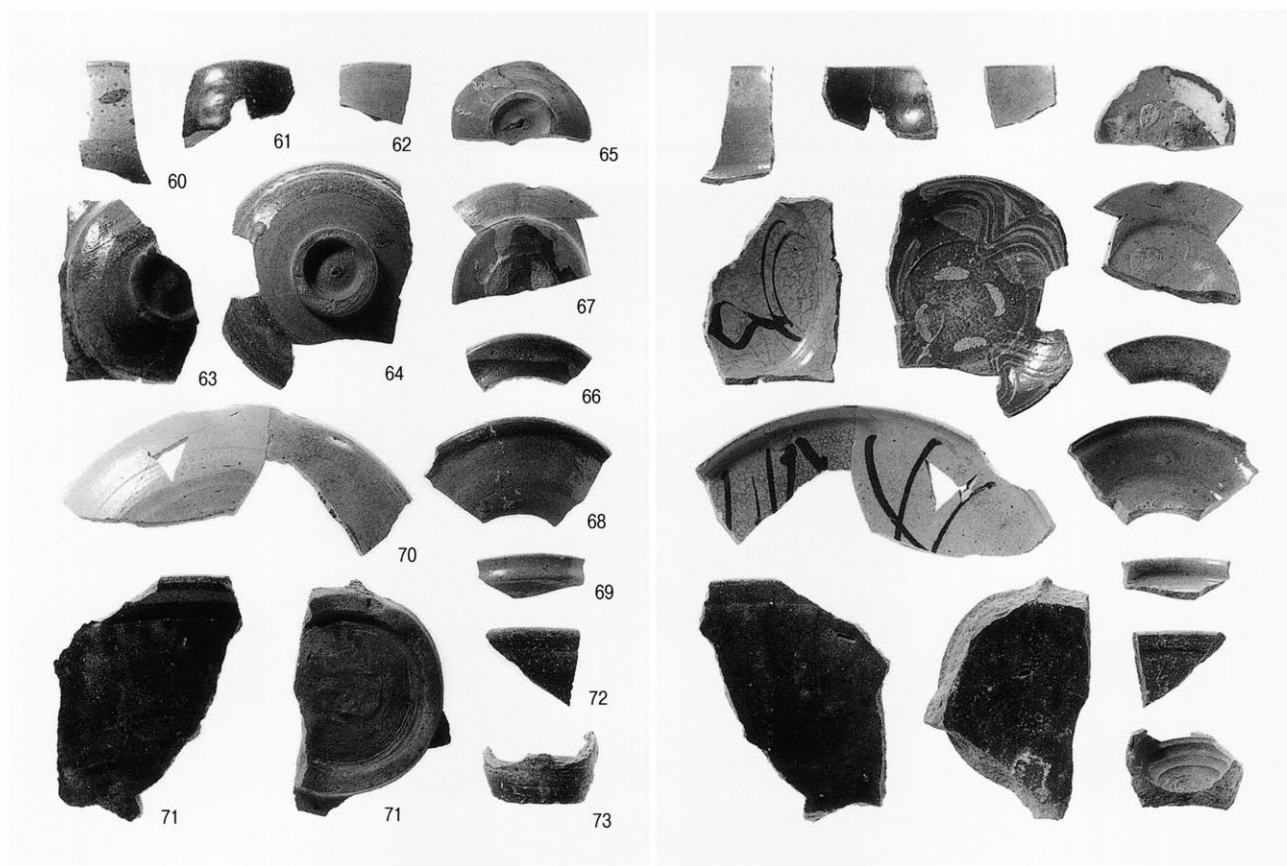
(2)14-2区石垣S X 19掘形・裏込め出土遺物



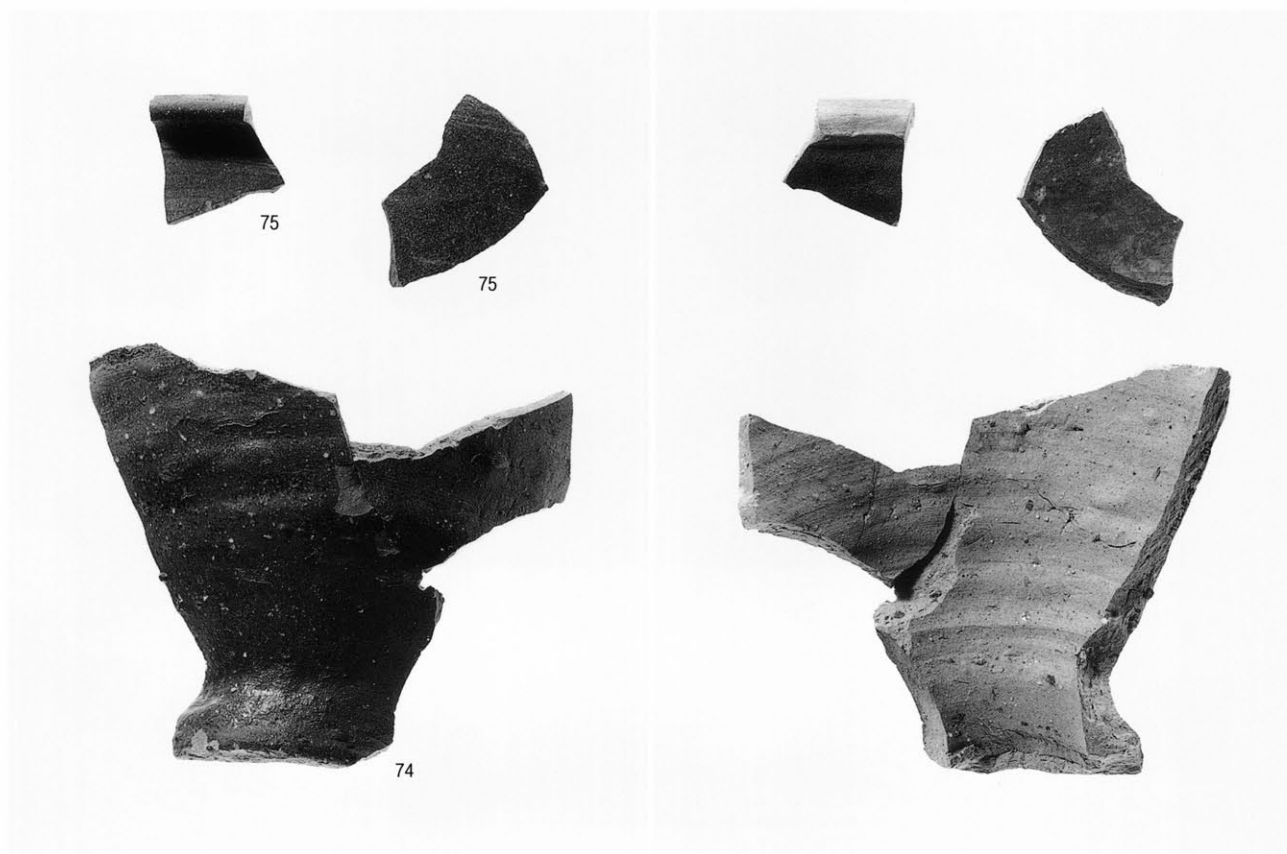
(1)14-2区石垣S X19前面出土遺物



(2)14-3区溝S D 2 出土遺物 1



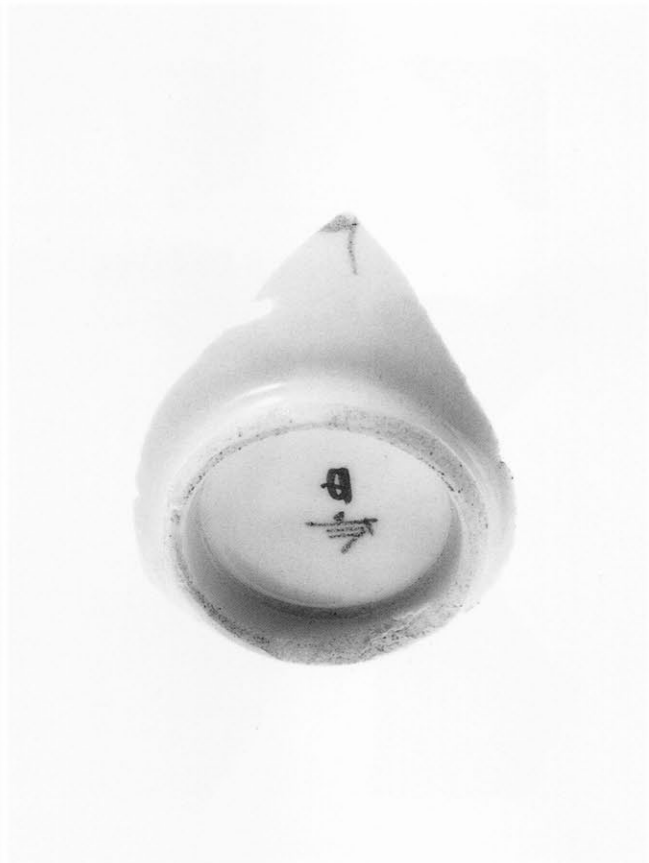
(1)14-3区溝SD2出土遺物2



(2)14-3区溝SD2出土遺物3



(1)14-3区溝SD2出土遺物4

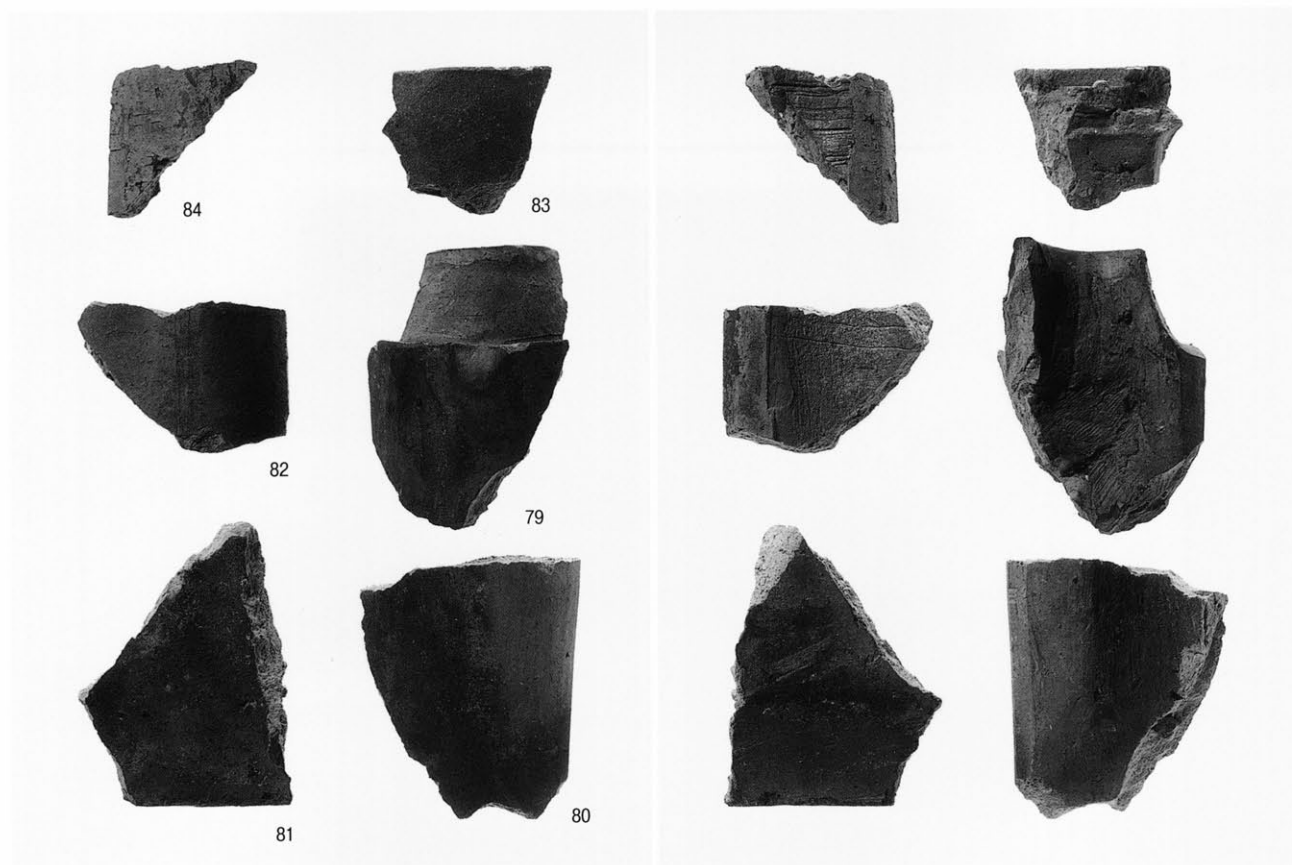


(2)14-2区石垣SX25裏込め出土遺物



(3)14-3区井戸SE6出土遺物





(1)14-2・3区出土瓦1



(2)14-2・3区出土瓦2



M

(1)14-2・3区出土瓦3



83



85

87



89

90

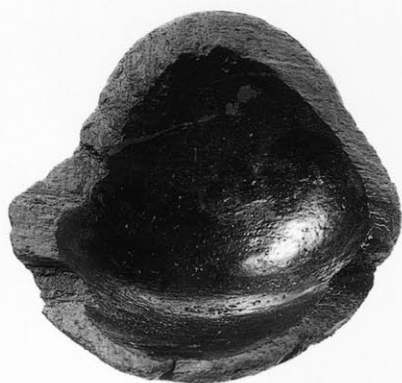
(2)出土漆器1



91



94



95



105



105



106



109